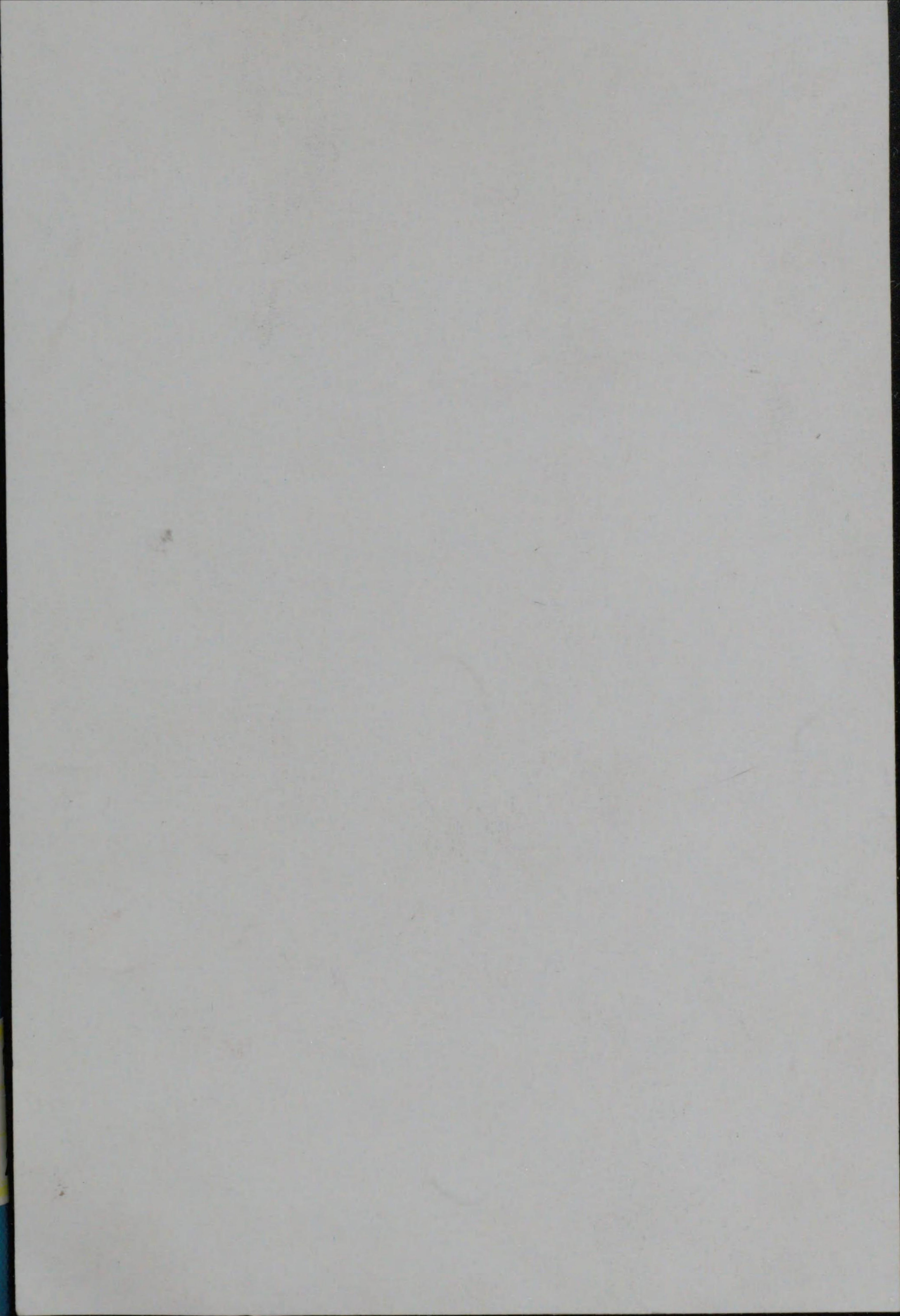


723

723-222



1200501587790



723

222

村憲吉

歌作品  
島田浪吉著

三省堂發行

591

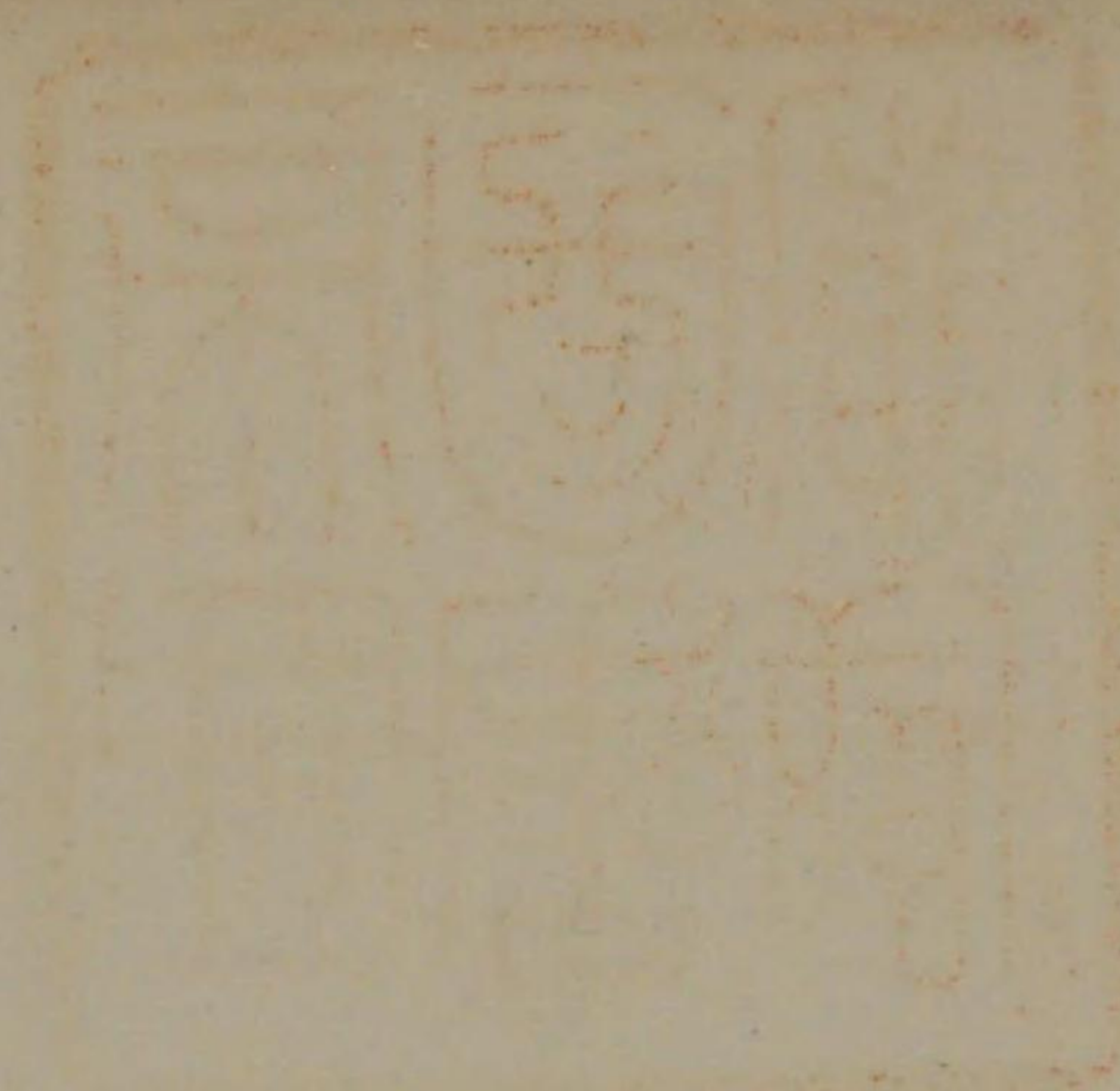
五  
九  
一  
六

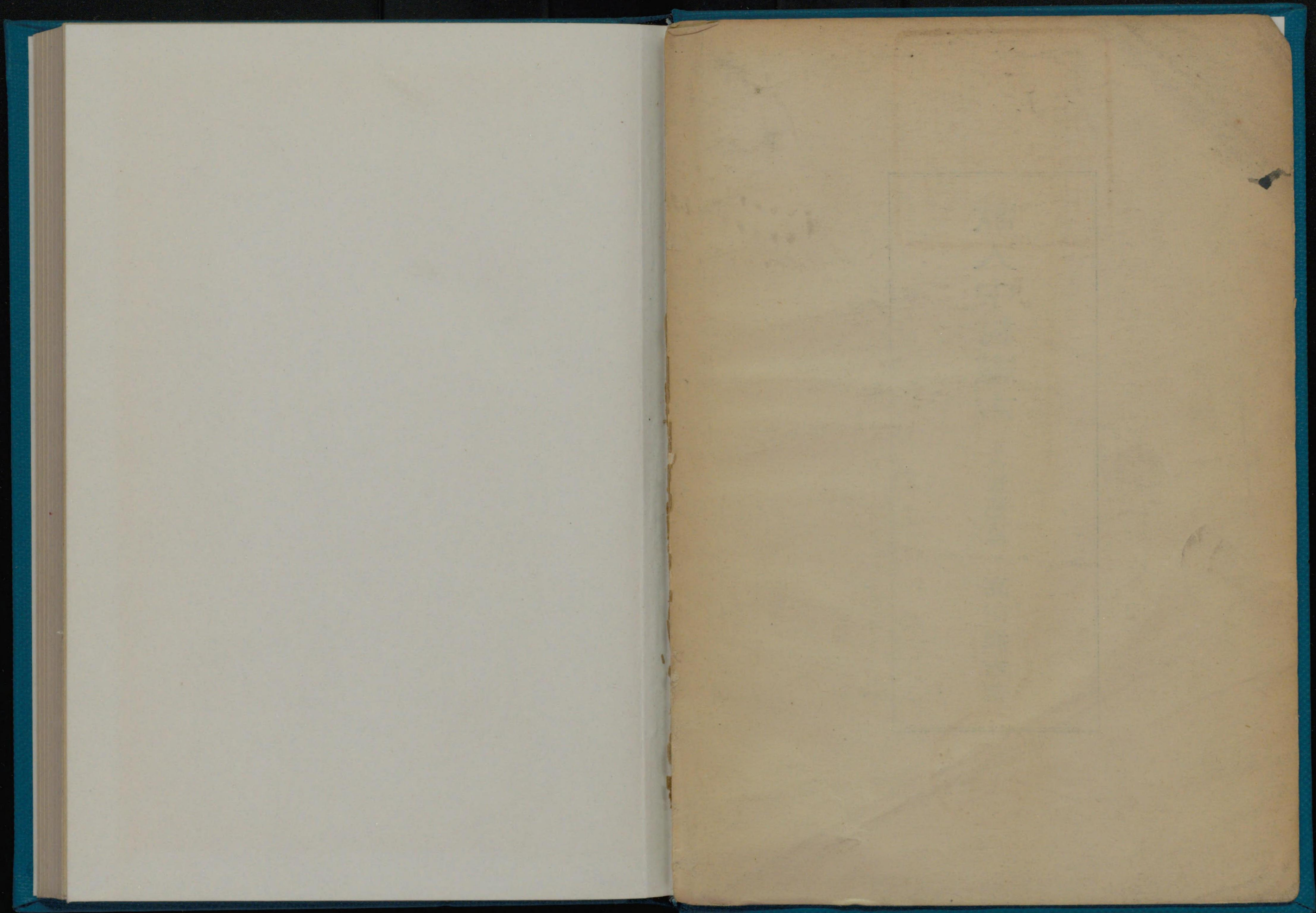


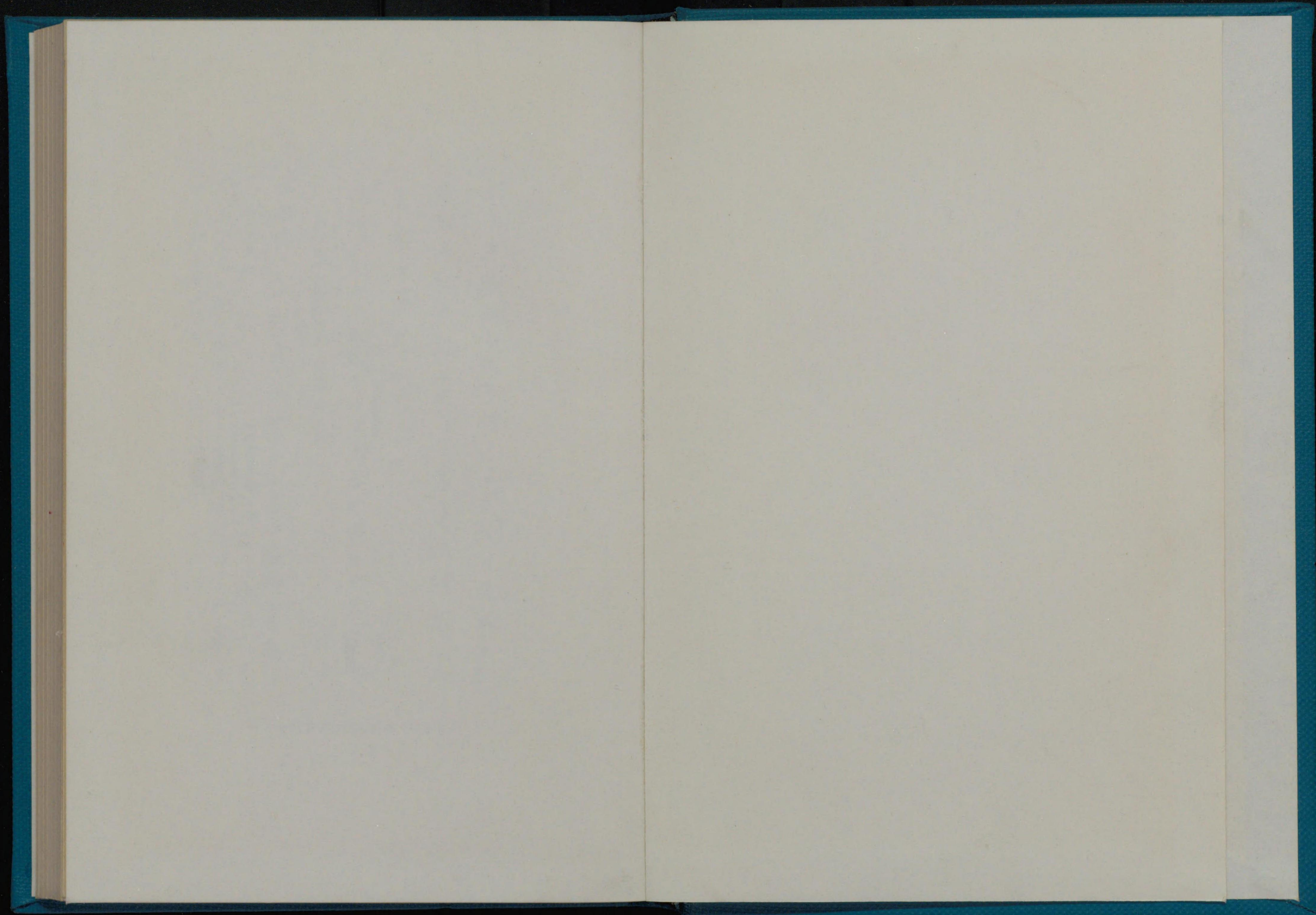
歌  
人中村憲吉

その短歌作品

高田浪吉著







どうも歌はなれて相すまが間に合ひや。  
 左記を訂正の上。家も煩雑落つか  
 ず句々作失礼か。  
 ○ かくまねる山田とがふ  
 宿常宿るうら  
 ○ 国境のかが山に末て添水つく山家  
 ねむりぬ  
 ○ 山望の秋めくはゆしの  
 ちがしやにけり

中村憲吉の訂正歌稿（はがき）

723  
222

### はしがき

本書は、中村憲吉氏の歌集「林泉集」「しがらみ」「輕雷集」「輕雷集以後」の各集中より作品三百三十七首を引用して、そのうち八十八首に就いて評釋をした。作者の生涯をとるどころに於いて語るやうになり、作品價值、作歌態度、歌風の變遷等に及んで了つた觀がある。この研究が幾分たりとも、中村氏の面目を傳へ得られるならば、著者の本懐とするところである。ただ著者淺學の爲に、見解の狭い憲吉觀となつた事を恐れるのである。今後の勉強を以つて補ふことにする。

作品は、始め各歌集中より引出したが、中村憲吉全集本によつて校合した。

「輕雷集」の正誤表は、昭和六年九月號のアララギ誌上に發表されてゐるが、清涼殿「一聯中の一首、『小暗かる燭とよのあかりに慣れたまひ生ひたまひける明治帝思ほゆ』の第一句は、全集本に據ると「乏しかる」と改められてある。これは前



記の正誤表には見えてゐない。作者が生前、自家用の歌集に訂正を書き込んで置いたのであらう。

本書は三省堂の需によつて著作したものである。匆忙の際とて不備の點が多いと思ふが、かうした小著が、今後の憲吉研究の資となり得るならば幸ひである。上梓に當つていつもながら書肆の御厚意を深く謝すと共に、出版部の石渡惠四郎氏に索引作成、その他種々の御盡力を得たことを感謝する。

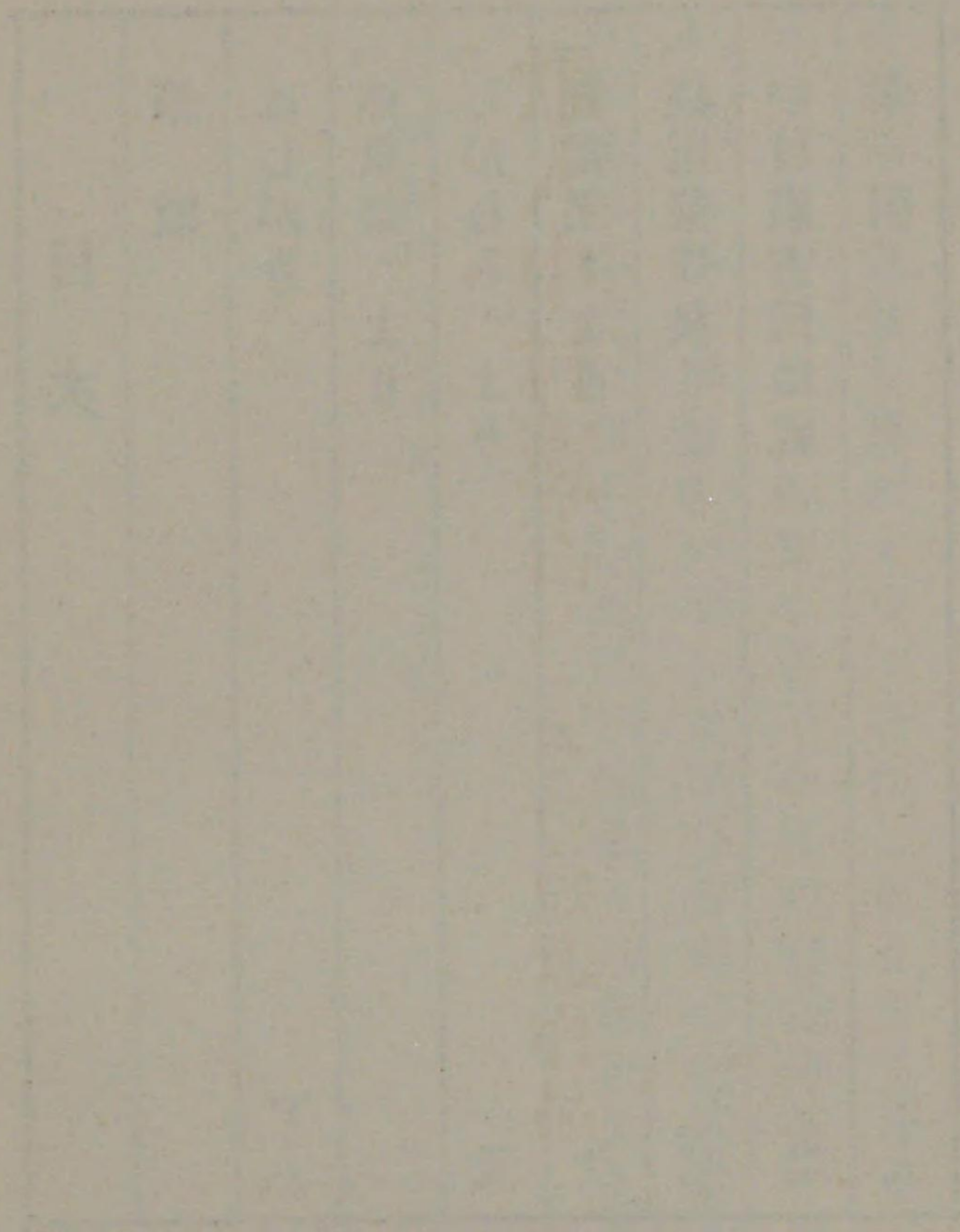
昭和十三年十月十七日記す

目次

筆蹟	
はしがき	一一二
「林泉集」より	一
「しがらみ」より	元
「輕雷集」より	三
「輕雷集以後」より	一六
中村憲吉氏に就いて	一七
索引	一八

歌人中村憲吉

その短歌作品



このゆふべ山にて聞けば麓田に麥藁を焚く  
音のま近かさ

夕暮どきに、山に居つて聞くと、麓の田で、麥藁を焚く音がま近い。歌集、林泉集の「新緑の海岸」十四首中の一首である。軽微な肺炎加答兒を病んだ作者は、大正三年、轉地療養のために、神奈川県葉山に來てゐた。季節は夏にならうとする新緑の候であつた。

東京帝國大學法科大學經濟科の學生時代で、すでにこの時は、島木赤彦との合著、歌集、馬鈴薯の花が出版されてゐた。

この年の前年、恩師伊藤左千夫は逝去したのである。あたかも大正三年は、島木赤彦の東京生活に入つた年であり、雑誌アララギの健康的な發芽をみよ

うとする頃であつたのは意義が深い。

當時のアララギの若手諸同人は、題材の上にも、句法の上にも、種々の變化を試みようとした變動期であつた。しかるにこの歌は、靜かな事象に即かうとして、やたらに句調の變化を狙つてゐないのである。洋畫風の手法が偲ばれる。他の歌を二三首引用してみよう。

はしけやし葉山茂やま日のひかる海に迫りて夏

ならむとす

新みどり濃き谷底の一枚田このゆふかげに田植

ゑゐる見ゆ

宿かへて錢やや乏しおぼつかかな向うの岬に蟬の

鳴き居り

いろいろの境地を取入れた歌風である。作者は九十九里、鎌倉、葉山に轉地して療養に勉めてゐたのである。平福百穂氏宛の大正三年五月二十三日附のハガキをみると、

拜啓。先日は御はがき有難く存じ候。うれしく私も繪がかいて見たくなり、熱心に机上の花を寫生いたし候。御貴臺様の「スケッチ講義早く出れば好いにと存じ候。私も會員になつて勉強して、あなたを驚すやうな繪をかいて見ます。大變な意氣込で御座いましょう。ハ、、、、餘言別としまして、「アララギ」の畫會の繪十二枚頂きました由大變有難く存じます。その代り「アララギ」を勉強して、好い雜誌にして御禮します。

○うつつと黄花底に爛れたる黒に疲れて物を

こそ欲れ

○繪を終へて疲れよろしも日の光り海の外から

ぼつと射し來も

何時もながらの御厚意深謝にたへません。御禮旁々。

葉山からかういふ風な便りしてゐる。憲吉のある時代の圓熟した歌境を知るには、どうしても百穂の畫風も考慮に入れて味はなければならぬ。百穂の畫境と人格に、熱情を傾けた憲吉は、作歌上の信念をおのづから深めていつ

たのである。

ゆふ濱の異國旅人の夫婦づれ歩みしたしむ  
渚しら波

夕暮の濱べを西洋人の夫婦づれが親しげに散歩してゐる、渚には白波が寄せてゐる。葉山か鎌倉あたりの海濱である。スケッチ風な歌で、別に高雅な歌風とは云へないが、異國的色彩が偲ばれる。この歌は、『蒼き渚七首中』の一首であつて、この一聯には、青春の感慨が詞句の上に漲つてゐて、何か、それをはつきり外へ現はしきれないものを持つてゐる。他の歌を引用して當時の作者の浪漫的な一面を知つておきたい。

はかな言ゆめうつつには信ぜねど在るにあられ  
ずあをき潮騒

白なみの蒼きなぎさに消ゆるごとかなしき世に

は戀を思はじ

堪へ難い孤獨感がこれらの歌の底を流れてゐる。不斷に活動する海浪の形狀を、若い自分の落著き難い戀愛の苦悶に結びつける、その動搖した氣分情緒なのである。神祕的な感じとでも云はうか、蒼い渚と云ふやうな色彩感によつてそれを表現しようとしてゐるのである。偶々、夫婦づれの異國旅人の姿を、夕濱の上に見たのであつて、作者の現實感は強く蘇へるものがあつた。

さうして渚は蒼く夕ぐれが迫つてゐたのである。『ゆふ蒼しなぎさの浪にあげられし微温き玉藻を取りて嘆くも』とも歌つてゐる。季節はやはり五月であつたが、赤彦に送つた消息の一節に、自畫像を描いて曰く

丁度頭の上から電燈が照つて居り顔は大部分影になり候。消してはかきかいては消し、その内よく似たの出來候も又消し、今は疲れ候故このま  
まに致し候。

口元などは似て居たのだが眉目をつけると似なくなりしたため又かき直し斯様なものになり候。早々。相州鎌倉坂下海月樓にて。大正三年五

月一日夜九時より十一時までには漸くかき上ぐ。

鹿兒島の高等學校時代の學友、水原信一氏は、憲吉追憶文を書いて、その一節に

中村君は無頓着の人であつたが常に小さい圓い鏡を持つてゐた。朝夕、それでよく顔を覗てゐた。或る時鏡と云ふものは實に面白いものだと曰ひ出した。さうして鏡には哲學が含まれてゐる、斯うして毎日觀てゐると自分の顔が映り然かも種々變つた顔をすればそのまゝ變つた顔が映る。自分は鏡の哲理てふ論文を起草して見たいなぞ曰うてゐた。

憲吉は、後「對鏡心理論」といふ論文を起草してゐるが、赤彦に鏡をみながら自畫像を描いて送つてゐる文面には哲學めいたことを言つてをらぬだけ甚だ興味深い。一種の作者の感傷氣分であるが、かうした逸話は憲吉の作歌態度を知る上の参考となるものである。

新芽立つ谷間あさけれ大佛にゆふさりきた

る眉間のひかり

新芽の匂ふ谷間は浅い、そこに鎮座する大佛に夕ぐれが迫つて、大佛の眉間が幽かに光つてゐる。大佛は鎌倉の大佛である。この歌は當時評判の高かつた歌であつて、作者もなかなか得意であつたらしい。苦心の作である。「眉間の光」と題する十首中の一首である。夕さりきたるであるから、夕べが來て、西日の餘光のやうにも感じられるが、單なる夕方の薄明りが眉間に光つてゐるのかも知れぬ。この一聯の終りにある詞書は、『五月八日。全國一帯に互りて日月その色を變ぜりと新聞紙は傳ふ。予時に鎌倉にあり。夕方ふかく思ふ事ありて一人大佛の谷にさまよひて月の赤きをかなしみければ即ちよめる歌。』とあつて、この文章を讀むと、赤い月の光のやうにも思はれるが、恐らく月の光ではなくて、夕方の薄明とみるべきであらう。ところが、左の歌をよむと、夕月の光とも解せられる。

ゆふ月の赤くながるる谷つべに奇しき今宵の露

佛のひかり

この歌でみると、露佛全體に夕月の光が流れてゐるやうにみられる。み佛に歸依する心持、大佛の眉間に尊嚴な感じを覺めてゐる心持、さうして露佛の異様な光に感覺的のものを覺めつつあつたのである。

暮れそむる淺山かげに大佛の膚肌はあをく明か  
らむとす

大佛の肩のうしろにおのづから淺き夕山沈みた  
る見ゆ

いづれも丹念に大佛の四邊の空氣を現はさうと苦心してゐるので、作者の謂ふ淺い谷間の露佛の姿がくつきりと描き出されたのである。伊藤左千夫の明治三十五年作に

かまくらの大きほとけは青空をみ笠と著つつよ  
ろづ代までに

御佛のはなつ光はとことにはに國のもる人まねく

すくはむ

憲吉は、勿論これらの歌も意識してゐたであらうし、與謝野晶子の歌、『鎌倉や御佛なれど釋迦牟尼は美男におはす夏木立かな』も意識してゐなかつたとは云へない。左千夫の歌は、信仰的な感慨に終始してゐるやうであるが、晶子の歌は、やや皮肉感が伴ふ。憲吉の歌は、官能的で、氣分、趣味も加はつて、作者の息衝ひが感じられてくる。例へば、『大佛の乳見そむれば松の間が眼にわづらはし松葉こまかに』と歌はれてゐる如く、歸命頂禮の觀察のみではなくて、歌の背後に、青年流の情感が潜んでゐるやうに解せられる。ドラマチックの氣分情緒とでも云はうか、月の赤きをかなしみ、云々などの感傷が、大佛に對する感動を深めたものではあるまいか。

灯なかより埃ののぼる宵あつし十字街にく  
れば汗ながれけり

電燈の光が街上に明るくつて、そこから砂埃の立つのが見える。かうした暑い宵に、十字路のところまで歩んでくると汗が身に沁みて流れてゐた。「淺宵裸馬列」と題する十一首中の一首である。三句の「宵あつし」は、原作「宵あさし」であつた、後に改められたのである。勿論改められた句法の方がよろしい。この歌だけでは裸馬の列が分らぬが、他の歌によつて淺宵裸馬列の光景が偲ばれるのである。埃ののぼるは、裸馬の歩みに立ちのぼる埃なのである。風の吹いて来るさまなどは歌はれてゐない。黙々として行列してゆく街上の裸馬である。

列りて行く馬みな裸馬なりほこり立ちたる灯の

なかく行くも

いななかず裸馬のひと群とほりしが埃にほふも

街のあかりに

當時の東京の舗装されてゐない街路は、砂埃が容易に立ちのぼつた。この裸馬は軍馬ではなくて、牧場に賣られてゆく馬である。あるひは、屠殺場へ引

かれて行く馬であつたかも知れない。これらの歌の構想には、泰西の畫境を思はしめるところがあつて、東洋畫風の構想では決してない。根底に萬葉集を愛しながら、かうした洋畫風の歌境の容易に生れてくるのは、泰西文藝の深い理解が作者にあつたからである。

夏の暑い淺宵の街上、裸馬の行列、當時にあつては特異の題材と云へるであらう。かう云ふ歌になると、憲吉は、赤彦の都會の歌よりも感覺が鋭敏に活動してゐるのである。この頃は、作者にとつて、餘程、都會の雜音に狎れて、むしろ雜音の中に身を浸してゐたのであつた。

大河口の夕焼がたの船工場音をやめたりそ  
の重きおとを

河口に夕映えがして、岸に並ぶ船工場に重々しい機械の音が止んだ。「構橋晚景」十六首中の最始にある一首である。水墨畫風のやうであつて、「林泉集」の



百穂の挿畫にかうした光景を描いてゐるが、やはり隅田川の河口の畫である。大正元年二十四歳の時、深川の不動尊境内に下宿してゐた作者は、幾度か、大河口の晩景に心ときめかすものがあつたであらう。

河口の船工場に起重機の音あがりてより日は久しくありけり

この歌も、前の歌と場所は同じである。かう云ふ歌になると、すでに一風格を見せてゐるのであつて、現代的題材を取扱ひながら萬葉の所謂傳統的な持味を句間に沁みわたらしてゐる。この構橋の歌は、『林泉集』の大正四年の部に入つてゐるのである。二十七歳の時であつて、二月に長塚節が歿した。六月に歸國して徴兵検査を受け、七月に東京帝國大學法科大學經濟科を卒業したのである。結婚したのは十一月であつた。「構橋晩景」の歌は、かうした年に製作されたのであつて、むやみに新しい題材を喜んで作つてゐる様子でなくて、念入りな表現によつて、構橋を寫生してゐるのがいい。構橋は永代橋である。永代橋は徳川期の歌人田安宗武の歌に、『永き代の橋を行きかふ諸人は

おのづからにや姿ゆたけき』の一首がある。

夕づく日構橋のなかを行けりしが我が足もとに  
帆を巻く音す

しまらくは構橋したの小蒸汽船より街衢にのぼ  
る油煙の臭ひす

なかなか念入りな自然描寫である。隅田川河口の晩景を彷彿せしめる上乘の作と云へよう。現代では、かうした構想の歌は珍らしからなくなつたが、當時にあつては、歌壇を瞠目せしむるに足りる作品であつたらしい。これらの歌の前に、千鳥橋の一聯があつて、深川風景を巧みに描寫してゐるが、私などは、當時、憲吉の歌の特長を知つたのは、この「千鳥橋」の一聯からであつた。例へばその中の歌を二三引用してみるならば、

倉庫堀に小夜潮ふかしわが眼透し眼にみるもの  
が白き架け橋

さ夜ふけの星居幽けき千鳥橋他の橋へうつる寂

しき人か

假り橋を來る老婆あり夜の目には太葱一ぼん手に持ちしろし

かうした種類の歌が、所謂官能的の歌であると云ふところから、詩歌に興味を持ち始めた頃の少年期も過ぎようとする人の氣持に、藝術的な感銘を與へたらしい。しかしながら、これらの歌が、歌壇全般にひろく影響を與へたとは謂はれないが、アララギの歌風の一特色として、憲吉のかうした種類の歌風は、相當歌壇の注意を惹いたとみていい。夜葱を持つて歩くなどと云ふ境地は、俳人の好む題材のやうであるが。

おほ君の御城を見ればみんなみの御ほりの岸に草長けにけり

大君の宮城を見奉ると、南の方の御濠の岸邊に草が長く伸び茂つた。「草刈

舟八首中の一首であつて、先づ草刈舟を歌はんとする始めに、御濠の岸の草を詠んでゐるのである。

みかほりに乏し雨ふり松のした漕ぎゆき濡るる  
草かり小舟

いかにもゆつたりとした表現である。すでにこの年は、作者は結婚生活に入つてゐたのであつて、牛込に新居を構へて、東京に就職口を求めてゐた頃であつた。『大きみの高宮がきの青き土手目につくゆゑに貴く思ほゆ』かう云ふ氣持が「草刈舟」の歌の根底となるものであつて、都會生活者にして、餘程靜かな氣持にならぬと、かうした境地を見逃して了ふのである。心中で感じてゐながら、ここまでの表現に容易に至らぬのが、塵埃の巷に住む人の常なのである。後にこの作者に依つて表現されてゐる、桂離宮の歌、清涼殿の歌を識る上に、心深く記憶しておかねばならぬのが、この草刈舟の歌である。

眞日透きてわか葉かさなる深みどり匂ひし

たしもわが衝く息に

晝間の日光が透く、重なり合ふ若葉の深緑の匂ひは親しい、自分は息づいた。「青臭」八首中の一首である。何んの木の若葉であるのか分らないが、初夏の季節感が、持前の作者の感覚によつて、樹木と共に人の息衝くかのやうにふんはりとした感じで齎らされてゐる。若葉の色と、身が融け合つたやうな味ひのある表現である。青臭とは、葉群の匂ひである。つまり春が過ぎて夏にならうとする時の生物の息衝ひ、快い若葉の感觸、人間ならずとも、小鳥さへ羽をふつて歡ぶ、その季節である。『わか葉より小鳥墜ちつつ羽ふりて相交歡べりその下草に』等の歌もあつて、この「青臭」の歌には、歡びの感情が漲つてゐるやうである。さうして、新婚の感慨が一緒に融け合つてゐるのであらう。

若葉かげ深きかげにて眼をひらきわが魂いのち  
怪しく思ほゆ

我がいのち怪異に目覺めぬ深わか葉うつし身の

肌はだに青くひかれば

頭の非常に活動してゐる歌である。若葉の深く重つた蔭で眼を開いた感じであるが、事實として、當時の作者の生活状態を考へておくといひ。學生時代の自由な生活が終末をつげた、そこから湧き出た冴えた感覺とでも云はうか、あるひは象徴的な表現とも云へるのである。所謂西洋の近代詩風の影響があつて、作者独自の歌境を生んだのである。

若葉深くわが入り來れば製薬の匂ひしたり

ぬわが眞近くに

若葉する樹間を深く入つてくると、製薬の匂ひが身近くに滴るやうに感じる。「綠蔭製薬」八首中の一首である。四句は、原作「匂ひはふかし」であつた。第一句で若葉深く、と云つてをるから、滴りぬ、と改めたのである。若葉と、製薬の匂ひ、ここにも異常な感覺の活動をみるのである。

赤羅ひく晝にこぼせる薬液の烟れるならむ匂ひ

つよきは

薬の香劇しく吹けばわか葉より緑素を吐きて吹く心地すれ

感じを思ひきり出した表現である。製薬は何の薬であるか分らぬにしても、當時の所謂官能的の歌である。感じたものをすべて自己の歌境の中に消化せずにはゐられない衝動によつて作られたやうな歌である。このやうな種類の歌ばかり詠んでゐたならば、恐らく神経は疲労して了ふかも知れない。つまりこの独自の歌境をどこまでも續けて行くのは、實に苦しいのである。なぜなれば、これらの歌には、短歌の本質的なリズムが伴つてゐるからである。このリズムに並行しては、容易に、右のやうな感覺的の歌は、前進できないのが常であるらしい。無理に押通すならば、自由律への轉換方法が、神経の疲労を休めるかも知れぬ。

しかるに作者は、苦しくとも短歌の本質的なリズムを尊重しつつ自己の感覺を押し進めて行つたやうである。かう云ふ場合に一つの助けとなる方法は、技巧上の修練である。修練如何によつて、苦吟の跡が表面化さずに内容に籠るものが製作されるのであるが、當時の作者は、結局表現の苦勞に時間を多く費してゐたのである。

前に述べた、自由律的の傾向になつてゆく、と云ふ問題に一寸觸れておきたい。つまり、題材の新奇を覚めるのが急であるために、同一のリズムの中にその題材を取入れるもどかしさを感じる餘り、五七五七七の手数が苦痛になつて、自分だけの息衝ひによつて音調の満足を感じるやうになる、そこに自由律歌の生命があるとするのである。句讀點とか感歎符などを附けて心を休めるのは、その一例と云つてよいであらう。果してかうした表現法が、詩歌の進歩であるか、頗る疑はしいのである。

短歌の本質的なリズムの場合にあつては、形式に入つて、形式を出てゐるもの、さうして形式を無視してゐない表現、ここに短歌の永久的な持味が藏されてゐるのである。今日、右鑑賞の憲吉の歌を古いと感ぜしめないのは、短歌の本

質的な苦勞をしてゐたからである。例へ題材が今日ではすでに古いと云はれても、題材を動かしてゐる力は、永久に不變なのである。

槻つき竝なみの下かげ行けば煉瓦れんがみち靴おと響くそ  
の家いえかげへ

槻の木の並木の下を通つて煉瓦道がある、いま自分はその上を靴音を立てて歩いてゐる、その靴音が家蔭の方へひびいて行く。「槻の道」十七首中の一首である。東京帝國大學構内の情景であらう。大正五年以前には、かう云ふ歌はなかつた。學生生活を終へてからこのやうな歌が出来てゐるのは面白い。常に永い月日の間に經驗してゐた歌心であるかも知れない。溜つてゐたものを、外に現はしたとも感じられる。

大竝樹おほなみきつき槻つきよりわたる若葉かぜ我がはなひれば寂  
しくし覺ゆ

高槻たかつきの濃き芽をふけば赤れんぐわ教室けうしつのとほり  
は夏になりたり

槻の道ゆふ日が霧きればもの蔭に醫科大學いくだいがくの鶏けいな  
きにけり  
使丁しちやうひとり竝樹なみきをよぎり夕まぐれ建物たせものの壁に消  
えたるあはれ

現今流行する藝術寫眞の構圖に似た感じを受けるが、當時かうした趣が短歌の上に取り扱はれてゐた點をよく觀察してみなければならぬ。立體風に見た、自然物の明暗と云ふ事も作者は意識してゐたに違ひない。結局洋畫風の域を脱し切れないものがあるかも知れぬ。ただ歌に於ける主觀的の觀方には、繪畫の構圖とは全然相違するものを持つ譯だが、作者は忠實に一つの情景を現はすために繪畫的手法を用ひてゐるかのやうである。破綻を感じしめない句法であつて、どこまでも寫生に重きをおいてゐるのが、これらの歌の持味と稱すべきか。赤煉瓦、醫科大學、使丁、建物、等の語に注意してもよいで

あらう。作者の歌は、かげとか、くらくとか、ふかしとか云ふ語が相當に多く使はれてゐるが、それぞれ有効に使はれてゐる點を讀むべきであらう。

乾きたるこの鋪道に錢おとし四邊にひびく  
靄のふかきに

乾いた街の鋪道に錢を落したところ、深い靄の中で音を立てた。「青靄の夜」八首中の一首である。大きい建物がぼんやりと見えたり、一間位先きの人の顔の見えないことがある。大川端あたりに立つ靄は、深く異様にこもるのである。この歌の境地は大川端ではないが、なるほど靄が青く深く街上にこめてゐたのである。この歌からは、順調な詩句の運用がみられるのである。靄が鋪道をこめて夜は更けてゐるが、鋪道の上がまだ乾いてゐるのである。又こんな境地も歌はれてゐるが、

青き靄ちかくながれてわが息はちまたの夜に慣

れがたきかも

このやうな神経質な歌もある。原作は三四句、わが息の長息にふかくである。改められた方がいい。青き靄とはつきり云つて了つたところに、幾分作者が、色彩感によつて題材を生かさうとする技法手段も目立つのであつて、當時のこれらの作品は、試作とみられても仕方あるまい。後に出てくる現實的な作風を思へばである。

おほほしく曇りて暑し眼のまへの大き向日  
葵花は揺すれず

天候がはつきりしないで暑い、眼の前に咲いてゐる大きい向日葵の花は揺がない。「向日葵」一首中の一首である。風の無い曇つた一日である。黄色い印象的な向日葵の花に向つて夏の暑さに息衝く作者の様子が窺へる。ちかづきて曇りのふかき向日葵の大きな花に

## 顔を寄せけり

かう云ふ歌もあるが、この向日葵の歌で思ひ出すのは、大正三年作の『ほかにまた或はをとこ近づきて向日葵の花めぐりつらむか』と云ふ歌である。嫉妬の感情を歌ひ上げてゐる作である。女性を向日葵の花に譬へたのである。自分は向日葵の花に心を寄せて注意を怠らずにゐるが、自分より他に男性の一人がをつて、やはりこの向日葵の花に心を寄せてゐるのかも知れないと云ふ、日の照る方に向いて咲くと云ふ、つまり氣の移り易い女性を向日葵のやうに思つて歌つてゐたと解すべきであらう。大正三年の向日葵の歌に比較して、二年後のこの向日葵の歌は、暑い日に咲いてゐる大きい向日葵の花の形状を歌ふことに苦心してゐるやうであつて、すでにこの作者としての歌境を生んでゐるのを注意すべきであらう。ゴオホの繪の強烈な色彩を、勿論作者は念頭において作歌してゐたのであらう。後期印象派の畫風から學んだ人は、アララギ同人中、特に憲吉の作物に割合に多く見受けられるのかも知れない。いづれにしても重々しい歌調であつて、淡々たる歌風でないのは云ふまでもない。

岩かげの光る潮より風は吹き幽かに聞けば  
新妻のこゑ

岩陰となつて光つてゐる海潮の上から風が吹いてきて、幽かに新妻のこゑが聞えてくる。「磯の光三十四首中の一詩である。この一聯は、岩かげ十一首「晝磯二首」海の珠七首」島の裏に來りて」九首」夕潮」五首からなる連作體の歌である。物質的には恵まれた作者の新婚生活であつた。瀬戸内海、海濱の穏やかさは、歡喜と融合するかのやうに、作者の心の奥底までも浸みわたるを覺えたのであらう。

身はすでに私ならずとおもひつつ涙おちたりま  
さに愛しく

過去の自由な身勝手な生活から、いまは配偶者との一體の生活は、自分一人

の自由を許さなくなつたのである。妻の生活もそこに加はつたことを、身はすでに私ならずと歌つてゐるのである。自らを愛しむ氣持でありながら、妻をも愛しむ歌である。これは一つの人生の最大の歡喜であるが、その中に眞珠の光澤のやうな悲しみが潜んでゐるのは見逃せない。

わたつ海うしろの後の岩のかけにして妻に言いらせる母のこゑすも

海濱に遊ぶ母と、新妻との睦じい話聲が岩陰から聞えてくるのである。何んと云ふ美はしい情景であらう。

作者の感激は高潮して、

磯潮いそしほのひかりを浴あみて斯くのみ常に眞幸まきさきくあらむと思へや

短みか世のつまと思へばうら愛かなしひとりよりのときの涙しらすな

と歌ひ上げてゐる。この歌のかうした手法を吾人は模倣すべきではなく、

どこまでもこの作者のものとして味ふべきであらう。安心しきつた疑ひのない作者の心境であるから、一寸寄りつけない歌の持味なのである。感傷的な歌と云へばそれまでであるがさうでない。歡喜心を歌ひ上げてゐるのだが、作者はただの満足感に浸つて自然の前に低頭しかつ涙を流してゐるのではない。反省力の強い作者にとつては、例へて涙を流す歌を作つてゐるようでも、そこには云ひ知れぬ寂寞感が籠つてゐるのである。つまり作者の作歌生活の上に深く結びつけられて、短歌の形式の上にかくまで自身を出しきつた態度が尊いのである。ここまで感激を歌ひ上げ得られるならば、落涙したからと云つて、決して甘いなどとは云はさぬのである。

磯いそ榎えんの樹皮こがはこぼるる日のさかりおのづから悲し

ひとり思へば

磯にある榎の木の幹の皮はこぼれ落ちてくる日盛りである、ひとりごころに自らを思ふと自然に悲しさが湧いてくると云ふのである。波の音が聞えてくるかのやうに、静かさを思はしむる歌であつて、これらの調子は、まさに憲



吉調なのである。

おぎろなき息をもらせり内の海八十島かげに水  
のひかれば  
おほけなく涙おちたり生ありてあり磯の珠も母  
と拾へば  
山かげの海べを見れば松の間にゆふべ寂しく草  
を刈る人

いづれも優れた歌である。一日限りなく日は照りかがやいてゐた、夕べのくるまで作者は海濱の静寂に心親しんだのであつた。「磯の光」の大作は、林泉集集中の壓巻である。作者にとつても、世の短歌愛好者にとつても、永く忘れ難い感を與へてくれる作品であつて、古來これだけの連作體の歌としてかうした題材を取扱つた歌はないのである。若々しくて、悟りぶつたところがなく、力一杯の調子で押してゆき、いかにも健康的な歌風を成就したのである。感傷的な詞句が所々に使はれてゐるけれども、全調子に融け込んで少しもわざとらしさがないのである。

これらの歌が、大正五年二十八歳の時の作歌であるを思へば、作歌者たるもの深く畏敬の念さへ覺えるのである。この年の十月郷里に歸つて家務に従ふ事になつた。さうして十一月に第二歌集「林泉集」を出版したのであつた。以上「林泉集」の歌の鑑賞を終へて次の歌集「しがらみ」の歌に移つてゆきたい。

梅雨の日は部屋のくらきぞ寂しけれ書きた  
る文を巻きてわが居り

梅雨時雨の降る日は部屋も薄暗くて、ひどく寂しくてならない、いま自分は書き終へた巻紙の手紙を巻いてゐる。「しがらみ」の始めにある「雨蛙」十三首中の一首である。この雨蛙の歌は、郷住後旬日を経て發表された歌であつて、歸國以來十ヶ月餘り作歌を休んでゐたのである。さうして發表された雨蛙の歌は、いままでの作歌には見る事の出来ない潤澤な風格を示したのであつた。

馴れない家事にいそむ作者の生活から生れた歌風は、かう云ふ濼い境地のものであつて、日常属目の生活相を歌つてゐるに過ぎないのであるが、看過してはならないのは、作者の全身がこの歌にこめられてをり、それを客観してゐる態度である。作者の郷里は、廣島縣雙三郡布野村である。「しがらみ」の編輯雜記で作者はかう述べてゐる。

予の郷里と云ふは中國山脈の小峽間に介在した寂しい一宿驛である。此處では新しい文化教育を受けたほどのものは、大抵が廣い世間で働くために他郷へ巢立つて行くのであるが、獨り予のみは逆に都會から歸つて、そこの古い家族のなかで父祖以來の家業に就いたのである。

華やかな都會の生活を離れて郷里に歸住せねばならなかつた氣持には、云ひ知れぬ寂しさがあつたのは、歌の上にも、文章の上にも犇々と感じられてくる。作者に云はすると、『窮屈な土俗の因襲と、煩雜な人事の交渉とがあつて、『一宿驛である山村の生活を堪へ忍ばねばならなかつた。従つて短い歌の形式に心の集るのは當然の成行であつたらう。』

氣のつけば柱のうへの大時計二時をうちたり宜  
べや久しみ

めづらしく庭に鳴けるは背戸川のかはづがのぼ  
り樹に鳴けるらむ

家のうちへ聲のとほりて鳴くかはづ襖みな開き  
て奥庭あをし

歌柄は例へば、艶消のやうな光澤を持ち、自然觀照が行きとどいて隙のない句法である。表面的な印象歌に終らず、内面深く籠るものを常に要求するところが、手數のなかなかつた歌風なのである。

崖したに搗きはじめたる水ぐるま人くんだり  
行く頭かくれつ

崖下に止まつてゐた水車が動き出した、傍の道を下りて行つた人の頭が水

車の蔭にかくれた。「夕雨」十一首中の一首である。村道の一情景であるが、何んとも云ひ得ぬ親しみを覚える歌である。このやうな單純な表現は、一寸出來ないのである。粉飾のない結構の歌でありながら、山家の空氣といふものが如實に描きつくされてゐる。潤澤な歌は他に幾らも見えるが、このやうな素朴さは、やはり憲吉の歌風の一特色なのである。

降る雨の細になりし夕つかた屋敷水車の搗きいでにけり

かういふ歌もこの歌の前に見える。作者の神経の細さを推して知るべしである。

端居よりとほくし見ゆる倉間のコスモスの  
揺れ秋づきにけり

家から遠くに見えてゐる倉の間に、コスモスの花がしきり揺れてゐる。い

かにも秋である。「冷寒」五首中の一首である。やはりこの歌も、山里の一風景である。大柄な歌ではなく、むしろ小味の歌であつて、幼稚な感じさへ伴ふのであるが、コスモスの花の形状が、いかにも秋らしい風情を現はしてゐるので、この實感は捨て難い趣なのである。

食料に買ひたる鶏が放ちあり夕雨のなかに濡れて  
佗びしき

夕雨につぶさに濡れし裏山の木ぬれの黄葉眼に  
染みにけり

繪畫風の趣であり、俳句趣味のところもないではない。高い歌境ではないが、しっかりと自然を觀察してゐるのがいい。

下思ひの頻きてかなしきこの夕も早くきた  
りて鴨が田に居り

何か心の奥の方に頻りと悲しい思ひが湧いてならない。この夕暮も早くやつてきて鴨が田に遊んでゐる。「秋情」八首中の一首である。三四句の關係少ししつくりとしない感じがある。それは「この夕も」は「この夕べが早く暮れ來つて云々であらうが、鴨が早く夕べの田に歸つて來た」と云ふ風にも感じられる。少しくこころ邊がまはりくどいのである。一首全體の結構は妙に寂しい感じであつて、つまり夕べの田に鴨をみてやるせない氣持を抱いたとでも云はうか。この歌の次ぎに、

眼にとめて吾も寂しき日暮れがた刈田のうへに  
穂をひろふ見ゆ

これらの歌が、ミレーの繪をみるやうだと云へるのである。

峡間よりうごき來るもの砲兵隊の車馬のと  
どろき近づきにけり

山の間の道から動いて來るものは砲兵隊だ、その車馬のとどろく音が近づいて來た。「砲車隊」十七首中の一首である。大正四年十月四日附の、池崎忠孝氏宛の書簡の一節に、

一昨夜はこの宿驛に砲兵二大隊泊り申し候。馬四百、兵六百、野砲十六門、約一里に亙りて宿泊いたし候。峡の夜は暗く雨降り候へ共時ならぬ哀な賑を呈し候。

と見える。「しがらみ」の歌は、大正六年の中に輯められてゐるが、池崎氏宛の書簡年月は大正四年であるから、必しも池崎氏の書簡の上に見える砲兵隊のことを題材としたとは云へない。つまり、『秋づけば必ずとほる砲兵隊の今日もとほりて國越えにけり』と歌はれてをる如く、作者にとつて、數回の經驗事實の上に立脚しての作なのであらう。とにかく製作年月の詮索は、この歌の上にあまり問題とはならぬ。「砲車隊」の一聯は「しがらみ」集中の白眉とも稱せられる。一聯の構想は、西洋臭が感じられてゐると云はれるが、外國文學の影響を感じ易い學生時代、特にロシヤの農民生活を描いた小説、あるひは戦争



物語文の接觸によつて、おのづから受けた西洋趣味が、血となり肉となつて歌の背後に潜んでゐたと解すべきか。一峽間の風物の中に點綴された砲兵隊の姿、それを忠實に寫生した結果が、この歌の異色となつたのである。

都會の景物にかつて馴れ親しんだことのある作者にとつて、都會趣味も手傳つて、田園の自然が、かくの如くに新奇の色調によつて表現されたのではあるまいか。

兵を待つ宿驛は日闌くれ軒したの馬盥のみづに

塵の浮びぬ

朝照らふ宿驛に入りくる先頭の馬上のへいのか

げの大きさ

かう云ふ微細な感じの歌であるが少しもくどい描寫となつてゐない。宿驛を、まやと古語を用ひたりしてゐるが、これも歌は古くならないのである。「日闌くれ」の語にしても、古めかしいのであるが、清新な感じが伴ふ。馬盥に塵が浮いてゐるとか、馬上の兵の影が大きい、とか云ふ觀察の妙を深く味ふべき

である。

店さきの障子の棧へ震ひつつ砲車の列のひさし

くとほる

砲車隊とまる音おもし然すがに馬上にねむる兵

おどろくも

峽ふかき宿驛に兵とまり馬のにはひ革の匂ひの

満ちにけるかも

騒めきて兵を犒らふ宿驛のなかに役場吏員はこ

ゑゑしけり

いづれの歌も萬葉調を土臺とした歌でありながら、決して古風の感じを與へず、むしろ現代的の味ひをつよく持った歌なのである。土地に親しみ、人情を解した作者は、技法上すでに悟入するところがあつて、容易にかうした土地色を具現する力量があつた譯である。「林泉集」の「淺宵裸馬の列」の一聯の歌を思へば、「砲車隊」の一聯の容易に發表されたのはもつともと首肯るのである。

寫生を根本となす作歌用意は、永遠の新しさを作品の上に附與するものでありと謂ふ信念によつて、作者はいかに感じを第三者に與へ得るかを、苦勞したのであつた。かうした題材は、一朝一夕で纏め上げられるものではない。永い間の經驗と、作歌苦心が重ねられて成つた結晶なのである。二十九歳頃の作品であるを思へば、吾人は忸怩たらざるを得ないのである。若々しく健康體の歌柄である事を附記しておく。

夏山をめぐりつかれて日暮れがたとなりの國の出雲へくだる

あをあをと茂つた夏山を見廻り疲れて日暮れ方隣の國の出雲の國の方へ下つた。自分の家の持ち山の檢分に歩いた時の歌であつて、「夏山」二首中の一首で、この歌の前に、

持ち山は繁樹になりぬ見廻りて啼く鳥さへも愛

しき夏山

脂の乗りきつた歌である。この歌によつて夏山が、自分の家の山である事が知られるのであるが、漠然として登山してゐる人の心持と大變趣きが違ふのであつて、日常路上往反と同じ感じであるのが興味ふかい。隣村へ一寸立寄つた趣きである。隣りの國が出雲でそこへ下ると云ふ感じが、妙にも寂しくひびくのである。古への風俗を偲ばしめる出雲の國柄は、現代に至るまで傳説的な感慨を呼ぶのである。作者にとつては、出雲路へ下るは、普通の事實であるが、第三者にとつては詩的な感動を覺えるのである。

麗しき日向へつれぬみどり兒の柔頬は透きて血潮さすみゆ

麗しく日の光のさすところへ連れてきて綠兒の柔らかい頬をみると、血潮の色のさすのが見える。「初笑」八首中の一首である。大正六年の一月に長女

の良子さんが生れた。始めての出産の喜びを歌ひ上げた「初笑」の一聯には、これも憲吉流の独自の手法と歌境の創造があるが、歌は、要するに人柄である事が思ひ知られるのである。この初めての出産のことをよるこんだ赤彦は、左のやうな歌を作つて憲吉に贈つてゐる。

眼のまへに汝れの赤子は生れ出で心おどろき歡

びをらむ

山峽やまがわの林のなかの水は汲み汝れの赤子を洗ふと

いふか

膝の上に抱き上げたる兒の動き心現しく愛しむ

らしも

この赤彦の歌は、やはり大正六年である。歌集「永魚」に收められてある。吉備の國の山峽の水で育つ赤子を遠く思ひながら赤彦は「心驚き歡びをらむ」と人の親となつた友の事を歌ひ上げてゐる。憲吉の赤子の歌は、眼前に赤子を見入りながら赤子の動作を微細に觀察してゐる歌なのである。泰西名畫の

構圖を偲ばしめる一聯である。

みどり兒は花を食べたらし口拭けば小指こゆびにつき

て夢うてないでたり

明るい浪漫的な感じのする歌であつて、容易にこんな調のいい、佳麗な歌は出来さうもないのである。日常の煩はしさを知らぬごとく、一事象を肯定して、所謂赤子らしい雰圍氣を歌の上に作り上げてゐるのである。

おぼる夜よの外そとのあらしに吹きおとす梨なしをひ

ろひしもべに下男しもべを行かす

雨霧のこめたおぼる夜の外は暴風だ、その暴風は畑の梨を吹き落すので、下男に命じて拾ひに行かすのである。自然の中に人事的な動作の織り込まれた複雑な境地であるが、手法の單純化が認められる。「峽のあらし」二十二首中の一首である。夕焼の歌と、夜の歌とに分けられてゐて、山峽の暴風雨の状態

をつぶさに歌ひつくした佳作揃ひの一聯である。暴風雨の來る氣配を先づ始めに歌ひ、次第に夕空の雲の暗くなるに従つて風雨の募つて來た夜の歌となつてくるのである。

夕焼の雲のくらめば暴れぬべみ峽の四方山ざわめき立ちぬ

小山田の灰屋たふると來て告げし日ぐれにいた

り暴風雨つものりぬ

潜戸よりおぞの暴風雨と云ひてくる人はしとど

に顔もぬれたり

雨かぜの音に眠らざらむみどり兒の起きて疊を

舐めつつあそぶ

朝庭は吹き荒れてありはるかなる山の木の葉の

散りまじりたる

これらの歌を読めば暴風雨のために家人のざわめく情景が彷彿として眼

に浮ぶであらう。それだけ表現の苦心が並大抵でない。「夕焼の雲のくらめば」云々の自然の變化などは、實に巧みに現はされてゐる。山峽の暴風雨にざわめき立つ村家の内外の状態と、人々の行動が、物語風に展開し、終の方に至つて暴風雨の止んだ朝のことが歌はれて、この一聯の結末を語り終へてゐるのである。やはり連作體の作品として申分なく成功してゐる。細かいところまで氣を配る作者の心持、下男や、下女等の詞が、歌詞として消化されてゐる點が注意される。粘り強い製作欲が、一首一首獨立する歌境を生んで少しも稀薄の感じを與へない。つまりねつとりとした作者の技法能力の充分に發揮された作品が多い。

朝ゆふの息こそ見ゆれもの言ひて人にした  
しき冬ちかづくも

朝夕寒さが感じられ人の衝く息も白く見える、人に親しさを覺える冬が近



づいて来た。「霧」八首中の一首である。「もの言ひ」は朝夕交す挨拶程度の感じであらう。山霧が村落に立つことの多い季節となつて、めつきり冬の寒さはやつて来たのである。この「霧」の歌にしても、永年の生活體驗から来る自然感を根底として再び新らたなる感動を以つて立ち對つてゐるのであつて、經驗上の事實が技法上の修練に依り土地色を現はすことに成功してゐるのである。歌になりさうでならなかつたものが、偶々作者の満ち溢れる許りの製作欲によつて、藝術的な雰圍氣を醸し出したのである。むしろ作者は、この雰圍氣の中に悔むところがない程自由なさうして拘りのない表現欲に満足したらしいのである。

うしろより町への用を云ひしかど霧にかくれて

荷車ゆくも

炭積みてあかとき峽を出てくだる落谷ぐるまに

霜おきそめぬ

落谷は部落の名である。このやうなスケッチ風な歌の内容にも、羨ましい程

自然の趣きが傳へられて、現代に至るまでも新らしさを感じる歌として鑑賞される。森田恆友畫伯の畫材に相通ずるものがあつたのは、恆友畫伯の畫境にも親しんだ作者にとつて當然あり得る藝術上の交渉と思はざるを得ない。

秋されば孫にも米を背負はしめ山の家より

人きたりたり

秋となつたので孫にも米を背負はして山家から老人がやつて来た。小作人が米を納めに山奥から来たのである。「寒しぐれ」十六首中の一首である。この一聯も山村の時雨の降る頃の景情がよく描かれてゐる。人情深い作者が、納米に来る人の身上を思ひやつたり、秋の寒い雨の降る山村を寂しがり幽かな物の音にも心のときめくのを覺えると云ふ作者の生活が偲ばれるのである。作者の家は醸造業であるが、山林を多く持つ富裕な大地主であつた。作者はこの大家族の中に在つて、店の仕事に眼をくばらなければならなかつ

た。煩しい人事の交渉は、ここに山村の自分の家にも多く持ち込まれて、作者の神経はその方へ傾きがちであつたらしい。しかしその諸事の煩しさも、物質上の苦勞と云ふ譯ではないのであるから、都會生活を數年やつて來た作者にとつて、この邊鄙な土地で、靜かな氣持を養つてゆくには、都合よかつた。一面山村の寂しさは、華美な都會の空氣を思ひ出す事によつて、益々、堪へ難い寂寥感に心は閉ざされた事であらう。作者が峽村に歸住して、田園風物の日常吟を多く作つてゐるのは、都會生活を經驗した賜であつたかも知れない。作者の歌に、吉備の國の一峽村の土地色がもの寂しく感じられるのは、郷土愛を根本とするのは勿論であるが、農民生活者への親しみが基調となつてゐたからである。「寒しぐれ」一聯の中には、小作人が納米にやつてくるその時の模様とか、そこに季節感が織り交ぜられて、農民の生活が描かれてゐる。一段高いところから農民の生活を客觀視しようとしてゐるが、いつの間にかやら農民への同情となつて、自分を出し切つてゐるのである。かう云ふ點が憲吉の歌の面白味であり、及び難い歌境を創造する所以なのではあるまいか。

冬に入りて納米減りぬ倉につるす秤の棒の日々に冷たさに

倉へ入りて今日も小暗し小作人より秤にかけて米を受取る

倉にあがる小作人は老いて懇なり草鞋をぬぎて足ぬぐひ居り

これらの歌は、すべて農民の一生活相である。人情が底に湛へられた歌で、所作は目立つとしても、容易にこのやうな品格のある調の歌は生れないのである。これらの歌には、理窟とか、思想とかが主ではない。どこまでも農村の上に現はれた人々の生活相である。さうして作者の慈愛の眼が老小作人の上にそそがれてゐる。

おしなべて寒き風かも川の瀬の五百箇岩群は濡れてこごれる

山村のどこもどこも寒い風が吹き立つて、川瀬に現はれてゐる多くの岩群は濡れて凍つた。「氷川」八首中の一首である。五百箇岩群は、萬葉にも出てくる古語であるが、岩が濡れてこざると云ふ着想が平凡でないのである。川水が岩群を越して流れたりあるひは、水の飛沫がかかつて岩面が濡れるのである。その岩面が凍りついてゐる光景である。「おしなべて」と云ふ動詞は、すべて一様に位ゐる意であるが、ここでは寒風がひつきりなしに吹いてゐる事を現はさうとしたのである。「なべ」は靡かす意の動詞であるから、作者は風の吹くと云ふ状態を思つて使つてゐるのかも知れない。であるから「おしなべて」の語の解釋の時に拘はるとやや句法のつき工合が不自然に感じられてくる。

樋のうへに重たくめぐる水ぐるま沫ことごとく

朝は凍れる

かう云ふ歌もあるが、やはり山峽の村の風情が如實に描きつくされた巧みな歌と云へよう。作者は、すでに題材を取扱ふのに、そのこつを知つてゐるの

である。どう云ふ詞が水車らしさを現はし得るかと云ふ、所謂、水車の概念を把握することがうまいのである。それにしても、餘程感受性が強くなければ、どうにもならぬのであらうが。

雪ふかき川しも見れば岸の上の竹むらしろ  
く川に垂れたり

雪の深く積つた川下の方を見ると、岸の上の竹群にも雪が積つて白く川に垂れ下がつてゐた。「雪の朝」八首中の一首である。この歌は明らかに日本畫趣味である。ここまでは、當時の作者の力量として容易に表現なし得たであらう。類歌が、現代の歌にあるやうに思はれるが、歌の持味は、子規流の歌境に似通ふものがあるのは否めないであらう。赤彦の歌にでもありさうに思へるが、どうであらうか。とにかく傳統的の調の持味に乗つて作歌してゐるのは事實であらう。

西の國の大き戦争なほやまず今日の天つち  
に年あらたまる

歐洲大戦は止まない、日本の國土には、今日、天に地に年は明け渡つた。「元旦」八首中の一首である。この歌が、他の歌を抽んじて佳いと云ふ譯ではないが、かう云ふ形式の歌も作者にある事を鑑賞者は注意していいのである。

東雲はすでにうごけれ下駄にふむ庭の堅雪へ赤  
くにほひて

東方の空が白んで朝日影が匂ふやうに堅雪に射し初めてきた美はしい境地である。「うごけれ」の語法に無理を感じさせられるが、作者の歌にはかうしたぎごちない語法の歌がところどころあるやうだ。とにかくこの歌は、いかにも元朝らしい氣分を出してゐる。

年の立つあかとき起きの星のかけ堅きゆきをふ

みて心ととのふ

雪なかに暗くせせらく屋敷川今朝も下り行きて

顔あらひけり

重々しい調でなくて、形式的な語調を意識して歡びの感情を歌ひ上げてゐる。清しい雪の降つた元旦の朝ばらけである。

春なかば山に残りし雪をとり我のつむりは  
冷されてあり

春の半ごろの山に残つてゐた雪が袋につつまれて熱のある自分の頭が冷されてをつた。「病床惜春賦」五十四首中の一首である。大正七年三十歳の、三月の初旬に、作者は腸窒扶斯を病んだ。五月上旬まで臥床の人となつた。年譜によると、臥床の時日本の歐洲戦争参加を知らなかつた事が記されてゐる。この時の病氣は重態であつた。この「病床惜春賦」は、たぶん岩波書店發行の雜

誌「思想」に一部掲載されたと思ふ。このやうな大作の病床吟をまとめ上げられたのは病氣の快方に向つた五月頃であつたのは勿論だが、とにかく平靜な心境は、自己の周囲のあらゆる物象に融合してゆくものがあつて、所謂自然を咀嚼玩味した表現であり、病床の苛立しさはあつたとしても、自らを反省するものが深く、看護に立つ人々の動作を、一々丁寧に描いた病床吟である。この歌の詞書を引用するならば、

假初の風邪とのみ思ひしは、腸チフスなりける。事顯はさず治療を受くることとなりければ、訪はるる醫師も看護の家人も、おのづから心遣ひのみ多かりなむ

と記されてゐるのであるが、家人の至れり盡せりの看護は、病者の心を和らげ、自然に敬禮する氣持を湧かしめたと云つても過言でない。

日ぐれ迄はまだわが知れり言ひつけて藁の蒲團  
を作らしめたる

春寒き夜の背戸田に鳴くかはづ冬をとほして死

なざりしかも

日のうちに度々來り見まねく去る父のうれひの

大きなるを知れり

枕よりすこしく見ゆる母のかほ妻のかほには氣

の張りの見ゆ

暗くせしわが病室にいく日か吾が子を見ざる日

を過しけり

忝く人みなありぬ病むわれのほしいままにせる

後のさみしさ

佳作はこれらの歌に盡きなく、他にも幾首か擧げ得られるのである。これらの歌の内容を知れば、作者の病氣の様子が一目瞭然としてくるのである。就中「春なかば」云々の歌を知るとき、詩境に心を安んずる人の生活さへ尊く偲ばれ、作者は病氣をして深い自然觀を確立したとも云へるのである。病床吟で有名なのは、晩年の子規の歌である事は云ふまでもないが、作者は、恐らく子

規の歌に刺戟されるところが常にありながら、病床の人となつて餘計にその刺戟を受けたと思ふのである。憲吉は、近くのを觀、さうしてやや離れた家の周圍を觀、又家の周圍の村をおもひ、山をも思つては、自分の病床へそれを引き寄せて寂しがつてゐた、このやうに病床吟は解せられるのである。

天井より黄の熱の降りてくる如く我がまぼろしの晝も苦しさ

事實は苦しい病勢であらうが、歌と爲し得るだけの餘裕が、この歌ひぶりにあるやうだ、健康的な氣持がなければ、かう云ふ風には現はれないとおもふ。黄の熱が降ると云ふやうな誇張的な云ひ方も、必しも冴えきつた神經とは云へない、どこかに安心がある。歌はこれでいいのだが、作者の技法は、病氣によつて可成り進んで來たのは否めない。讀者をある境まで引きづつてゆく程の力が見える。つまり技巧が洗練されてきてゐるのである。

この一大連作は、次第に病氣の快方に向ふ歌となつて、

この朝けはじめに含む粥汁の齒にかかりたる飯

のうれしさ

このやうな歌境へまで入り込んで來てゐるのである。芭蕉の『おとろへや齒に喰あてし海苔の砂』の一句が聯想されてくるのである。さうして、憲吉の歌の味ひには、芭蕉の味があり、蕪村の味があることが、一般的に感じ得られるのである。ついでをもつて憲吉の歌風の一端を述べてみるならば、憲吉の歌には、色と匂ひがある。ひびきは勿論、なくてはならぬのが短歌の原則であるが、ひびき渡る歌風と云ふよりも、香氣を放つて讀者に迫ると云ふやうな歌柄なのではあるまいか。しかし一概にかうは定めつけられないが、香氣を感じる作品が多いと云へるのである。特に病床吟の中にそれを感じたままを記しとどめておく。『春もややけしきととのふ月と梅』かう云ふ芭蕉の句をも思ひ浮べて、憲吉の病床吟を味へるのである。

我がまなこ衰へにけり若葉せる山にむかひて唯  
おぼろなる

この歌は、盲目となつた唐僧鑑真和尚の木像に向つて芭蕉翁が詠歎した

『若葉して御目の雫ぬぐはばや』の句を偲んで作つたと、詞書の上で記してゐる。いかにもその通りの歌柄である。とにかく『病床惜春賦』は、長塚節の病床吟とは違つたもの、静かな歌が多い。新らしい自然の観方を教へられる歌の多い一聯である。

わが前に小者とらはれて恐れ入れり山守の

口はいたく罵る

持山に入つて盗みをする小者が捕はれて山守に引かれて自分の前に來たが、山守はその小者を口汚なく罵り叱る。「山守」十九首中の一首である。珍しい歌境である。かういふ題材を歌にした歌人は古來ない。新しい詩境を開拓してゆく作者の努力を思ふべきである。この歌も連作中の一首で、前後の歌を味ひながら、この歌に接すると、餘計に興味津々たるものがある。村での素封家、中村家の持山を荒らした小盗人を、作者は、小者と云つてゐるのであ

る。實際小者であるが、この詞の語感には、少しも悪意がない。それだけこの歌の味ひが深い。噛みしめて味へば味ふほど、面白味と風格のある歌である。「山守」の始めの歌に、秋がやつてくると、山の盗人が増加すると云ふのがある。そこで山守の眼が光り始めてくるのである。その山守を詠んだ歌に、

朝まだき敷居をまたぐ山もりの顔すでに動き小

言をいふも

持山を看視する人を、自分の家で雇つておくのである。ところが、この山守のことを作者は「また物をぬすめり」と詠んでゐる。作者の心の奥底には、貧しい村の人々の生活が考へられてゐるのである。このやうな氣持を詠んだ歌に、

この村に貧しきがおほし天然の山にいりて半ば  
食をもとむる

とあつて、山の盗人に對する一種の同情心によつて、この事實を示してゐるのである。作者は、山の全體の姿を感じ、そこに起る諸の自然現象を抱擁するか

のやうに感じて、むしろ親しみをもつて人々の行爲を觀察してゐるのである。小者の捕はれた場所は、黄葉の林の中である、斧の音もいち早く耳に聞えてくる森閑とした山中である。その出来事が、藝術的な感興を作者に呼び起してゐるのである。

あまり小者を叱る言葉の峻烈なために、小者の眼は憎悪の色が血走つたやうに作者は感じたのである。山の持主と、山守、盗人、この三人の動作が、彷彿として浮びくるのである。小者を叱る山守もかつては、脅嚇をやつて獄屋に行つた人なのである。作者はこのことも歌つてゐる、結局誰人も憎めない氣持が「山守」一聯の根底に流れてゐる感情なのである。

貧しくて盗むを知れりわがまへの小者に向ひ叱りて思ふも

山もとへ人をゆるして去らせたり黄葉の間を下

り隠るみゆ

山もりを先にたたせぬ白髪交りさすがに老いし

その頭見つつ

かう云ふ歌が最後にあつて、「山守」の一聯の經緯を語り終へてゐるのである。人道主義的な感慨とでも云はうか、とにかく將來かう云ふ風格の歌がどのやうに變化してゆくか當時にあつて未知數な問題歌であつたのだ。

山かひの秋のふかきに驚きぬ田をすでに刈

りて乏しき川音

山峽の秋の深くなつたのに驚いた、田を見るときもう稻は刈られてあつて、川水の音が乏しくきこえてくる。「歸住十九首中の一首である。『大正五年秋東京より歸る』と云ふ詞書がある一聯の最初にある歌である。都會の生活を切り上げて、郷里に歸つて來た時の、始めての感じであつて、この歌は實にいい、恐るべき調のよさのある氣品高い歌である。季節に對する人の感受性がゆつたりと融け合つて、秋深い山河の姿を傳へてゐるのである。



峽の家に古りし洋燈をいまも釣れり久びさに父  
と膳を竝ぶる

みごもれる妻をともしひ歸りたり家に久しく母  
待ちたまふ

都會の生活に愛著を持ちながらも、やはり郷里に歸住するとなれば、そこには兩親の慈愛が待ち設けてゐるのである。まして妻をともしなつて歸つて來た、その妻は、子の母とならうとしてゐた人であつた。限りない一家の睦じさ、團欒のよろこびが作者の身内に湧くを覺えて然るべき事々である。この事實が歌の上に本然の相となつて現はれるまでには、可成の長い時間がかつたのである。さうしてかう云ふ歌が生れたのである。この歸住を一轉機として、作者は重大な意義を實生活の上に體得したのであつた。「しがらみ」の編輯雜記のところどころの文章を引用して、先づ作者の眞摯な社會生活に對する態度を知つておきたい。

予は次第に今迄全く無關心に過して來た實世間の通俗生活について、初

めて此處でその眞義と興味とを知ることが出來た。同時にこの鄉村の山川草木と土俗人情とのうちに、從來感知しなかつた、新しい深い姿の潜在するを發見することも出來た。

\*

眞意義ある人間社會生活は田舎で感得することが出來るのである。まことに此處で生息して居るものは、草木鳥獸魚介さへも一つとして人間の社會と密接なる交渉をもつて、廣い一團の社會を造らぬものは無いとも云へる。予の心眼はまたかう云ふ方面へ對しても目覺むるに至つた。傾聽すべき感想文である。都會生活の後に生じた作者の體驗であるが、この心境は必しも作者の新しい發見ではない。所謂東洋流の悟道精神とでも云はうか、偶、作歌修道の上から、作者は自分のものとして恥かしからぬ體驗を得たまでである。つまり實際の作歌苦勞が、右のやうな思想を生んだのである。ひるがへつて作者の生活態度を考へるに、本質的な歌を作らんがために、自然に自己の環境及び實生活相を觀察する機會が與へられたのである。さ

うして作者の本然の生活力がはつきりとして表面化し、それを内省することが出来た。

もしも郷里に於ける作者の實生活に、短歌を作る、と云ふ機會がなかつたとせば、どうであらうか。作者の寂寥感は、どこに吐け口を求めたであらうか。幸ひにして作歌への強い欲望は、生活と藝術と一體となると云ふ考へに落著いていつたのである。現代の作歌者にして、かう云ふ考へ方は、理解は出来るが、實踐化する事は困難である。

忘れたる十呂盤算そろばんざんになづみつつ村びとの顔を日ひに見知りぬ

忘れかけた十呂盤算に難澁しながら、自分の店に出入する村人の顔を日々に見覚えるやうになつたと云ふ、この歌の底にも、村人の素朴な人情味を愛する作者の感情が流れてゐる。物質上には恵まれた作者ではあるが、決して尊大な氣風をあらはして村人らに接してゐないのである。結局家庭を中心とした歌を作りながらである。

手を取りて言ひがたきかも現し世よにいのち  
を死なず君きたりたり

手を握りしめたが何んと云つてよいか、云ふ言葉を知らないほどの嬉しさだ、重病が癒えていのちを死なずに君はやつて來た。「春峽清音」十一首中の一首である。詞書に「百穂畫伯、重病癒えて保養旅行の途次、來りて我が山峽を訪ふ」とある一聯だが、就中この一首は、發表當時、アララギ諸同人の注目を惹いた歌であつて赤彦は「しがらみ」批評文で、

これは大正八年百穂畫伯盲腸炎の手術快癒後備後峽谷なる中村君宅を經て山陰道へ遊んだ時の事を詠んだのであつて、それを中村君は大正十二年六月號アララギに發表してゐる。この間滿四年を經てゐる。これは中村君の歌を知るに大切なことであるが、その問題は後に譲る。この歌を讀んだ時、小生非常に感激して四五人へ葉書を出し、且つ土田藤澤そ

の他諸君へいく度もその事を話したと記憶してゐる。この歌今見ても依然として感嘆に値する。それは中村君の人柄や本質を遺憾なく發揮し得て渾然化成の域に到達してゐると思ふからである。

このやうな批評文を読み、その歌を十餘年経過した今日味ひ、ますますその價値は減じてゐない事を痛感する。絶対信頼をおく、玉の如き百穂畫伯の人格と、その人の清純な藝術品に傾倒する作者にとつて、この歌境は、まさに感極まつての結晶と云つてもよい程のものである。赤彦の百穂に對する態度は、これ亦絶対であつて、世に稀な友情の發露となつてゐるのだが、その赤彦が、この歌を、かくの如くに感嘆してゐるのであるから、これ亦信じるに足りる作歌價値がある譯である。手を取つて喜び合ふ境地などは、たいていは甘きに墜ちてしまふ表現となるところだが、この歌は決して生なまはんかな感情の發露に終つてゐないのである。

春はまだ浅い山峽に、獨り藝術上の友もなく暮らしてゐた作者のもとへ、尊敬してやまない友の訪れは、朋遠方より來る亦樂しからずやと云ふ心持であ

つた。

山かひの鋤田すまだにいでて飛ぶつばめ旅を來つる君  
は春におどろく

四月の季節であつたが山峽の春は浅かつた。それでゐて燕は鋤田の上をかすめて飛んでゐた。この異様な春の姿に、塵埃の都會から訪れた畫伯は驚いたと云ふのである。この一首は「春峽清音」の最初にある。

日陰ひかげりの小早こはやき峽かひにかへり住み三とせ過すどしぬ友  
と云ふものもなく  
春あさき峽かひはともしき水のおと此處こゝに住む我を  
思ひたまはね

深い人情の交流、藝術上の交流、遠來の友と語り明かすよるこび、麗しく且靜かな山峽の自然は、あたかも春も訪れる頃偶、この大きい喜びに遭つたのであつた。春の訪れと共に訪れた玉の如き友の前に、ただ涙のはふり落つるやうな歡喜であつた事は、これらの歌を味へば誰人にもうなづかれる。作者は、こ

のよろこびを、數年間外へ出さずに、心の上に、手帳の上に記しとどめてゐたのであつた。この一事でも、この作者の歌に對する態度の、容易ならざる眞劍味が感じられるのであると共に、百穂畫伯に對する敬虔な氣持も、純情そのものであつて、第三者の心へもひびく力がつくづく思ひ知られるのである。

「手をとりにて」の一首を取り巻く他の數首は、作者の云ふ、春峽清音であるが、そこに山峽の生活を傳へて一沫の哀愁さへ添へた。例へば、相聞歌のやうな歌なのである。

君を送り國のさかひの山越えのふかき峽路にわ

かれけるかも

この一首が「春峽清音」の終りの歌である。百穂は、憲吉の郷里を發つて、出雲國へ向つたのである。何んと云ふ寂しい歌であらうか。旅路の友を迎へて名残りの盡きない友情の細かさを歌ひ、さうして作者は、友と別れる一時を、山路の深い「峽路」にわかれけるかも」と詠歎したのである。百穂と憲吉は、干支一まはりの年違ひであつて、作者は兄と親しむやうな氣持であつたらしいのであ

る。もつとも、百穂と左千夫は生前交りの淺からぬ友人關係にあつたのだから、先生の左千夫を敬ふ氣持は、勿論百穂へ通じてゆく自然な氣持であつたらう。先輩としての百穂との交流は、種々の意味に於いて、憲吉の歌境に示唆するものが多かつた。百穂にとつても、人情の厚い憲吉の人格と、潤澤な歌風に心惹かれて、自己の畫境の上に示唆されるものが多くあつたと思ふのである。作者は云ふ、『東洋的精神鍛鍊は又畫伯の人生藝術の一つの道であつた。』と。

うら山の芽吹きをはやみ殖えてくる春どり

のこゑしじに悲しも

裏山の木々の芽吹きが早い、従つて鳥が殖えてきて、鳴くその鳥のこゑが繁く悲しい。「裏山の春」十首中の一首である。作者の技倆としては、この位の歌は早速に作れるかも知れない。だが容易にこのやうな素朴な表現は、覺め得られない。うら悲しい春の季節感の現れてゐる歌であつて、他の歌を引用

して裏山の春を偲んでみたい。

四方の山みな芽を吹きて煙りたるたふとさ見れば  
涙ながらふ

山したをしづかに落つる堰のおと山よりくだる  
鳥ひとつあり

もつともこの引用歌の二首目は、もはや若葉の頃らしいが、裏山を詠んだ歌として、参考とならう。前の歌は、以前「病床惜春賦」の時に述べたが、芭蕉の『若葉して御目の霏ぬぐはばや』の境地に共通するものがあらう。自然の變化に直面して、涙を流すと云ふ作者の氣持には、恵まれた環境にも依ると思ふが、何やら人生に感ずるものがあつたとも云へるので、それは理窟ではなくて、自己陶酔的な感慨が多分にあつたらうとも思はざるを得ない。この陶酔の氣分は、作者にとつて諦めに似た感情ではあるまいか。又かう云ふことも云へる、作者は、いくぶん工夫を凝らして自己の歌境の流動を狙つたのかも知れない。

聲かけてみづ擔きとほる男らの向うへいそ  
ぐ 響さむし

挨拶をしながら汲み水を擔いだ男が向うへ急いでゆくが、尻が寒さうである。「初雪」十首中の一首である。酒藏の男が水を汲んで歩いて行くのを、雪の降る日、いかにも寒さうに見えたので、同情を寄せて詠んだものであらう。酒藏の男は、自分の家の雇人である。親しみの心がなければ、容易にこのやうな歌境を生まない。かつて見覚えのあつた光景を見てゐるのであるが、初雪の降つた日に、これらの事實が歌となつた譯である。

米磨桶の水をあがりて眞赤なる蒸氣立つ脚をを  
とこ拭きをり  
酒つくるみ冬とおもふ心せはし雪ふる今朝の洗  
場のうた

生活の歌だからと云つて、苦しさうな社會現象の歌のみとは限らない。個

人々の生活に對して、深い同情が湧けば、そこに詩を感受するのが、藝術家の持つ一つの習慣性のやうなものである。作者にとつても、かうした體驗は常に持ち合せてゐたであらうから、田舎のかうした、一家の中に起つた現象も、歌を作らうとする作者の氣持には、云ひ知れぬ藝術的感興が與へられたのである。やはりかう云ふ歌も、所謂生活の歌なのである。歌境として、古來あまり取扱はれなかつたものが、作者の息吹がかかつて描寫されたのである。この酒造場の光景が、都會人の心にも深く沁みるものを持つのである。

樽負ひてはひる人あり小蓑より乾ける土間に雪をこぼして

店の内へ樽を背負つて入つてくる人がある、著てゐる小蓑についてゐる雪が、乾いた土間に落ちた。「大寒」十一首中の一首である。心にくい程描寫の行きとどいた歌である。整つた歌である。どこにも隙のない歌である。整つ

てをるが、小さく固定しなくて調に動きがとれてゐる。作者は、一つのものを念入りに傍目を觸らずに描いてゐるやうであるが、作歌上の用意としては、上の方にあつて、一つの事象を俯瞰することを忘れてゐない。従つて歌が、立體風であつて、そこへ主觀句が自然に入り込んでゐる。平凡な人生觀などを加へない歌であつて、どこまでも客觀的立場を忘れないところがいい。

酒買ひに朝早くより來る子あり徳利を抱きて震へたるあはれ

これらの歌から、人生を論じるとなれば、理窟は種々につくと思ふのだが、作者は、それを歌の上で云ふのを憚つてゐるかのやうである。寒氣に徳利を抱いて震へてゐる子を哀れがつてゐるのは、歌の上によく表現されてをつて、作者の同情心も考へられるが、これらの歌が將來どの邊まで深められるか、少し問題となるのであらう。さて樽負ひての歌だが、雪を乾いた土間に落してと云ふ表現のうまみは、よくものを觀てゐると云ふ一言に盡きるが、いささか、趣味的な發想ともみられないでもない。

居竦縮めて朝あさ妻が拭きてやる幼児ふたり頬  
霜やけぬ

さながらに愛情の現れた歌である。上から下まで愛撫の情が流れてゐるやうな歌である。さうして、幼子をあつかふ人の姿が眼前に彷彿としてくるのである。この歌の次に『米倉の小窓の霞網に追ひとりし寒のすずめをまた括りぬ』の歌があるが「あまた括りぬ」と「居竦縮めて」の語感には、なにか微笑ましさをへ覚えるのである。

算用を夜おそく終へし帳場にて人手をから

ぬ寝酒わかすも

商賣の出納計算を夜おそくまでかかつてすませ、帳場で獨り人手をからずに寝しなに飲む酒を沸かしてゐる。「搾酒場」八首中の一首である。酒を好んだ作者が、造酒家である點が甚だ都合いいやうであるが、必しも作者にとつて

飲酒は大成をなさしむる器とはならない。だが作者は、酒を飲むこつを會得したのではあるまいか。大酒をあふると云ふのではなくて、ちびりちびり飲む餘裕ある飲みぶりは、飲むこつを會得したと同時に歌のこつをも會得して行つたのかも知れない。作者の歌には、泥酔した氣持を詠んだ歌などは一首もない。酒が好きであつた作者に、酒を飲む歌が無いとまで云へる。いかなる職業といへども、自分の職業となればすべて尊敬の心の湧くのは人情であるから、作者は、酒を尊敬しながら飲みつづけてゐたのであらう。盃を手にする度に、村の人々の生活を、肉親の上を思つてゐた事であらう。私は、作者の泥酔した姿をみたこともないし、燥ぐ聲さへ聞いた事もない。むしろ晩年に近いころの作者の、上京の折の飲みぶりに對しては、危懼の念さへ覺えたのである。寝酒を飲み、一緒に藥を飲んでゐた。この歌は、睡眠藥などを用ゐてゐない時であつたらうが、家業の重責に堪へて一日の精進は、「寝酒わかすも」の一句に重々しさを與へてゐるのである。學生時代に飲んだ寝酒とは趣きが違ふのである。

この家に酒をつくりて年古りぬ寒夜は藏に酒の  
滴るおと

この歌を作る時、作者は、寢酒でも飲んでゐたかも知れない。境地は、深夜であるが、前の歌のつづきと思ふと、どうも微醺を帯びてゐたとも解せられる、しかしそんな事は、この歌の價値を云々する場合問題とはならないが、ただ、藏の中で酒の滴る音がする、その音を、どれだけ身にびつたりと感じたであらうか。さうしてこの酒の音を、どれだけ歌の上に消化できたであらうか。作者は天性に庶幾い技法によつて、自分の家を題材とする歌を消化したのであるが、自分ながらよくも消化し得るものであると思つてゐたかも知れない。自他共にゆるした郷里詠のうまみは、すべて作者の作歌態度の背景になつて重きをなしていつた。吾人は深く憲吉の大正五年以後の郷里の歌に敬意を拂ふものである。

梅雨ぐもりふかく續けり山かひに昨日も今

日もひとつ河音



梅雨のふかく曇つた日が幾日も續いてゐて、山峽を流れる河音が、昨日も今日も同じところで唯ひとつ聞えてゐる。「梅雨ぐもり」五首中の一首である。この梅雨ぐもりの一聯は、「しがらみ集中重きをなすものであつて、複雑な作者の人生的苦勞が、内面に深く籠つて、作者としての技法の極まる」ところと、人間としての生活の深みを象徴したものとまで云ひ得るのである。自然對人事の交渉が、渾然一つとなつて歌境を高めたのである。これらは、單なる繪畫風の歌とは云へない。歌としての本質的なひびきと調の高さを示してゐるのである。上の一二三句まではこの作者として在來の持味と思へるが、「昨日も今日もひとつ河音」の句法は、堂奥に深く立ち入つた相である。幾多の歌境の變化苦勞を重ねつつ、ここまで到達したのである。

家うらに河音にぶき梅雨ぐもり山かひは今日も  
かぜとどまれる



ひさしく拭布をかけぬ本棚のうるしがうへに  
吹きにけり

これらの歌はみな優れてゐる。「山かひは今日もかぜとどまれる」の句法などは作者獨特の妙手であつて、及び難いものがある。次の本棚のうるしうへに黴が吹いたなども至れり盡せりの表現とおもふ。

前の歌の「昨日」「今日」の語感には、調を確定的に強める現實味がある。つまり歌はうとする事柄を、はつきりと印象づけてゐる譯である。寂しさに堪へた感慨が籠められた語であつて、これらの語の自然的なひびきは、勿論作歌者の持つ技巧手腕によるのだが、結局人格によつて強調されてくるのではあるまいか。この句法は、赤彦の歌にも見受けられるが、憲吉調として尊重すべき價值があらう。例へ憲吉の歌以前に、このやうな句の用例があらうとも、かくまで生動せしめて使はれてゐないのである。

夕暴れの峽にひろがる梅雨の雲つぎつぎに

飛ぶ山をはなれて

夕方風が吹き荒れて山峽にひろがつて来る梅雨雲が、つぎつぎに飛んで山の端を離れてゆく。「雨霧」十一首中の一首である。この一首も、實相を穿つた表現である。雲が「山をはなれて」は實に手が高いのである。齋藤茂吉氏の歌に、大正十四年頃、雲が「山の峰を離れず」といふ句法があつたと記憶するが、意味は反對だが同一の妙趣が感じられるのである。作者にとつては、郷里の日常吟であるが、これらの歌の相は、所謂山嶽詠とでも云はうか、なにか、不斷の氣持を離れた、作者の意氣込みが強く感じられてくるのである。古歌的な深みと、近代人らしい觀察の妙は、作者の深い感受性の賜でなくてはならぬ。

裏山の青葉に霧のわき立ちて五月雨ふれり濡る  
る樹をしも

何か作者は、かうした歌の中に、注文を持つてゐるやうだ。老成でなくて若さがあつて、それでゐる遊い境地を狙つてゐる歌風なのである。「濡るる樹を

しも等の句法の凡ならざるものを見る。「雨霧」の歌は、みな常の経験を土臺として、新たなる表現苦勞をやらうとする所があるやうだ。「しがらみ」はこの一聯を、大正九年の作として、大正十年に移つてゐるのである。

秋ふかき寒さに入りぬ宵よひの癖くせとなりつ  
つ雨ぞ降りける

秋も深く、寒さに入つた習なほしとなつて宵々雨が降つてゐた。「池の家」十一首中の一首である。大正九年三十二歳の頃、郷里を再び出でて、都會生活に身を置く事になり、攝州西宮市外の銚池畔に居を定める事になつた。この歌は銚池畔の借家にいまだ職なく遊んでをつた時の歌である。「宵よひの癖」となりつは、やはり含蓄のある句法で憲吉流の澁さがある。大正九年の春から、大正十年の十月末まで、無職の寂しさを託つて暮らした。なぜ作者は安穩な郷村の生活から離れたのであらうか。いま「しがらみ」の編輯雜記中の文章を抄録

するのが一番作者の心持を知ることの捷徑である。作者の所謂、心境の變化を讀者は認識せねばならぬ。

予は歸住足掛五年、しかも安穩に山峽四圍の風物人情に親しんでゐた生活を離れて、何故再び都會の生活に身を委ねるに至つたのか、それは別な理由をもつ予の自發的心願から起つたことであつた。予は歸住して實世間の生活に觸れるとともに、はじめて今迄ただ若き感傷世界に陶醉して、修業も怠れば自己の活くべき實世間と云ふものにも全然無關心であつた、過去の放肆なる生活について悔恨の念を生じた。第一予は予の内部に於ける實世間生活能力の著しく萎縮退化してゐるのをしみじみと寂しく感じた。そのみならず予には社會的にも自己に對しても、予の受けた専門教育に報ずるべき責任があつた。

このやうな動機で阪神の郊外、六甲山麓に居を定めたのであつた。社會は容易に仕事を作者に與へなかつた。無聊の生活が永く續いたが、作者の内面生活上の反省は、徒らに浪費されてはゐなかつた筈である。作歌者としての

憲吉は、一代の雄篇、比叡山詠をこの間に遺してゐるのである。この一聯は後に説くところがあるであらうから、香楡園の鉾池畔の雜詠を引用して當時の作者の心持を知つておきたい。「冬柳十一首」[鴉鳥十一首]中から若干抄出してみよう。

なまけつつみ冬にいりぬ鳥さへも池の眞なかに  
下りてかづくに

世のさまの甚くなほらぬこの冬は旅にすまひて

父ははをおもふ

冬ぬくき國に住みつゝ我ひとり遊ぶ今年を寂し

くおもふ

家ならば夜の池ばたに靴のおと冬は日ぐれてか

へる人ぞおほき

日曜はときどき門にかげを見るとなりの人は勤

人ならむ

これらの歌をすべて優れた歌と云ふのではない。ただ、當時の作者の心根がはつきりと分るところに興味がある。

山の木の焚くほどのものは皆柴に刈り京に

近き村は生業立つも

山の雜木の薪となりさうなものはすべて柴に刈つて、京都に近い村はそれを生計として立つてゆく。「比叡山」の歌は「白河口」七首「谷の道」八首「雨山暮情」十六首「鴉鳥」十一首「山坊夜話」十一首「根本中堂」八首と云ふ一大連作からなる大作である。この中から數首抄出して鑑賞してみたい。右一首の引用歌は「白河口」のものである。詞書に據ると、『傳教大師千百年の大法會に、入山禪居の御像を寫し納め奉らむとて、百穂畫伯比叡山にのぼる。誘はるるままに彌生もまだ寒き十一日、二人して登る道を白河口よりたどる』とあつて、白河口の山景、村落の風景を歌ふところから比叡山詠は始まつてゐるのだ。題材に趣

味的なものもあるが、元氣よく消化して行く手腕をみるべきである。さうして本格的な歌調「雨山暮情」を具現してゐるのである。

日の暮れの雨ふかくなりし比叡寺四方結界に鐘を鳴らさぬ

比叡山上には鐘樓があるが、古から鐘を鳴らさないのである。日の暮の雨の降りしきる中に、比叡山は鐘の音もきこえず静まりかへつてゐるその感慨が詠まれたのであつて、四方結界は、修道の地、比叡寺の大きい静寂を彷彿せしめる。「雨山暮情」はいかにも畫題のやうである。作者は恐らくそれを意識して使つてゐたに違ひない。

雨ふかき大杉がなかは物ものしく伽藍を構へ夕暮れにけり

雨霧の吹き朧ろかにせる杉の秀に伽藍の屋根の大きく暮れつ

雨霧が立ちこめて、大きい伽藍がものものしく夕暮れてゆく光景である。

ありさうな景情である。讀者は、かうした境地をもつとももの境地として肯定するであらう。傾く大きい伽藍の屋根、墨繪のやうな夕暮の景色だ。それを作者は意識してゐたに違ひない。

夕さればいにしへ人の思ほゆる杉はしづくを落しそめけり

山嶺より湖をひろく見て朗かに大き寂しさに入りたまひけむ

聖僧を偲ぶ現の心は、ただ及び難い畏敬の念にかられて、杉の大樹をみるに、琴の音をきいたと云ふ、これだけの歌境であるが、この歌の詞書に謂ふ、『山は玲瓏琵琶の湖に向ひて而も遠く、昔より天然の靈境相を具備す。』とある如く、つつましい作歌態度が窺はれる。「大き寂しさに入りたまひけむ」の詞句にも、大師入寂のときを偲ぶ、追慕の念の深まるものが感じられる。齋藤茂吉氏は「しがらみ」の評で、『杉はしづくを落しそめけり』『ほがらかに大き寂しさに入りたまひけむ』といふごときは、やはり、正岡子規、伊藤左千夫、長塚節あたりに

源を發してゐて、この作者によつて完成されたものと看るべきものである。』と書いてゐる。

しののめに山ふかき鳥を聞くものか比叡寺にゐるを寢て忘れたる

ふる雨におぼろなる木は梅ならし枯枝ひろがり  
鬮うごく見ゆ

一夜比叡山の宿院に寢て、東空の白むころ多くの鳥のこゑにふと目醒めたが、比叡寺にゐるのを自分は忘れてゐたと云ふのであつて「寢て忘れたる」の一句に、云ひ知れぬ妙味が感じられる。雨と梅の木の枯枝、鬮鳥のとまつてゐる風情は、俳畫趣味的のところがあるであらうが、まったく心憎い程いい題材を歌ひ上げてゐる。「おぼろなる木は梅ならし」の着想に注意すべきものがある。『山こぞり雨暗からしこの庭の明るみに居て去らぬ鬮どり』の歌もあつて、この歌は印象的である。

山坊の夜語りよがたに更けて向く僧は精進食しやうじんをたもつ

齒のきよくあり

山の上に世をかなしみて下りて來ぬ僧の多くが

山にはてけむ

人の世の生きおなじからず昔より世にかくれたる人のさみしさ

山のうへに春さむく僧の行きかへり黒衣くわいふくれ  
て白き襟卷えりまき

山上の僧侶の心持と、生活と、その印象を詠んだ歌である。ここにも作者のつましさと、深い人生觀が含まれてゐる。滞りない調であるが、これらの歌の内容には、趣味以上の感慨の藏するをみるのである。しかして作者は、歌詞の驅使に丹念である。

山上さんじやうにゐつる二日は雨降りて大寺おほてらふるき寂さみしさ  
になれぬ

油合羽ゆかっぱを垂れし我らの山駕籠やまかごは延曆寺えんりやくじに來て下くだ

されにけり

かういふ歌が最後にあつて大作「比叡山」詠が完成されてゐる。この比叡山詠は、憲吉の歌の中でも、もつとも力の籠つた雄作であつて、かつて比叡山詠でこれだけの大作を遺してゐる作者はないのである。作者が登山した頃の比叡山は、現今のやうにケーブルがなかつたので、山中も幽邃の趣きがあつた。諸鳥も啼いてゐた。従つて心靜かに山上で起臥するところがあつた。しかし一面には、作者の主觀にも依るのであるから、必しも靜かな場所が、靜かな感じをもつて歌へるものではない。結局作者のつましい作歌態度に據るところが多い。

父われの世わざに迷ふ寂しさを知らざる子  
等の手をひき遊ぶ

父である自分が、如何なる生業に就かうかとして迷つてゐる、この寂しい氣持を少しも知らないでゐる子供らの手をひいて遊んでゐた。「折にふれ」八首中の一首である。妻子とともに一借家に住み、自力の生活を未だ立て得ないで、徒食を歎いた歌である。かうした作者の生活に、作歌者としての位置とか、作物の氣品は、少しも損じられてゐないのである。素封家の一子が、所謂就職難に煩はされてゐるのも、將來を考へた上での作者の覺悟があつたればこそ、極めて自然に當時の作者の生活に同情心が湧くのである。

この子らをはぐくむ我と思へばあに生業のなき

父たりなむや

松の根に躓きつまづく兒の手ひき現身われはさ

みしくもの思ふ

内省的な歌柄であつて、むしろくどすぎるほど、自らの姿を省みてゐるかのやうである。職無く遊んでゐるのは、まことに頽廢的の氣分になる筈であらうから、作者は、覆ひ難い苦痛を感じ、歌によつてそれを脱れてゐたとも解せられる。作歌意識を弱めるまで、徒食の生活状態が食ひ込んで來なかつた事を、

せめてこの作者の爲によろこぶ。

國たかき信濃しなのの空にしたしみて君に會ふこ  
とは我の幸さいなり

山國の信濃の空といま間近くに親しみながら、君に會ふのは實に幸福である。「富士見野」十首中の一首である。西歐に遊ばんとする齋藤茂吉氏が、病後の生活を信濃の富士見高原に養つてゐた時、偶々、作者は、茂吉氏と逢ふ機會があつたのである。詞書を抄出して事實を知つておきたい。

齋藤茂吉君、今秋遠く西歐に遊ばむとして、暫く富士見野に籠りて病後の生を養ふ。上京の歸途を、たまたま百穂畫伯と行を共にし、之を訪ふを得たり。赤彦君また約に従つて諏訪より來り會し、その他アラギ同人多く會す

大體この文章に據つて富士見野の歌の模様が想像つく。右に抄出した一

首は、特に優秀な作品とは云へないが、歌柄に品格があつて、信濃の空に親しむと云ふ語感には、おろそかに出来ない感動があるやうに思はれる。

遠とほぐにへ別わかるる秋を妹背いもせ來て花野はなのにこもる人の

しづけさ

富士見野ふしみのの野のずるの川ははやくなれり甲斐かひに向

ひて國傾くにかたむきつ

病後の友を勞る心根は、かうした自然詠の中にも情味細こまかく現はれてゐるやうだ。この友を心配した憲吉は、富士見行のやや前、大正十年七月二十三日附の百穂宛の書簡の一節に『齋藤兄また少し弱つた由、洋行まで如何ですか。困ることです。どうも本當に身體を作る氣ならば、種々と苛立たずに本當に遊んで養生せねばならぬと思ひます。今遊んでなまけてそのため外國に行つてから多少損をしても長いことから見ればなんでもないと思ひます。今から洋行まで全力を擧げて遊んで身體を養ふやうどうか切に御忠告願ひます。小生からも申します。今度富士見に行くさうですが都合によれば小生

も一寸御邪魔してよいかと思ひます。赤彦兄よりも大に勧められてゐます。』  
云々。

友情の溢れた書簡であつて、かう云ふ書簡の中に作歌者達の藝術的交流の永久に離れ難いものが感じられるのである。偶、かうした書簡が世に發表されたと云ふことは、この富士見野の歌を鑑賞する上に、甚だ参考となる譯である。この時の富士見野に於ける、百穂、赤彦、茂吉、憲吉の會合は、各自富士見野歌を作らしめてゐる、意義深いものであつた。

明日よりは人にはじめて使はるるさみしさ  
持ちて父ははに向ふ

職を得た自分は、明日から始めて人に使はれるその寂しい心を抱いて今日郷里の父母の前に來た。「峽の村」七首中の一首である。この歌が最後にあつて「しがらみ」の一卷は終へてゐる。

大正十年の十月末、獨逸留學の途に上る齋藤茂吉氏を、神戸埠頭に送つて、その翌日十一月一日、大阪毎日新聞社經濟部に記者として入社したのであつた。その時の感想を「しがらみ」の編輯雜記の上で左のやうに記してゐる。『予は茂吉君を神戸埠頭に送つて置いて、その脚ではじめて新聞社に出勤したことを覚えてゐる。これで予も初めて人並に、自分で贏ち得た資料をもつて糊口して行けるのだと思つた時は自ら感謝の念が湧いた。』云々。「峽の村」の一聯は、新らしい仕事が見つかった、その報告に歸省した時の郷里吟である。

夕づきて寂しくなれる 峽の山かへれる 村には兵  
とまりをり  
山かひは人家乏しく 燈火點く谷のおくまで兵を  
とめたり  
旅に出て世に働かばしばしばは歸らぬ家とおも  
ひてねむる

この兵隊の歌から、大正六年の「砲車隊」の一聯が思ひ出されるが、「砲車隊」の歌



の方が元氣と、異色に富むものであるが、ここでは二つの作歌傾向を比較対照するのではない。關聯するものがあると云ふ程度の鑑賞に止めておけばよいのである。ただこの「峽の村」の兵隊の宿泊を歌った歌の中に、二首加へられてゐる、作者の生活の變化を歌った歌に、何やら心惹かれるものを持つてゐるのである。

年迫るあわただしさや道につれし老いし眼  
病みは米相場師なり

年の暮で慌しいことだ、往來で道づれになつた眼を病んでゐる老人は、米相場師であつた。「街頭歳暮」十首中の一首である。鳥目で夜歩きの出來ない老人を、大阪の堂島へつれてきて渡した時の歌であることは、この前におかれた歌、『夕橋に鳥目に見えぬ人と遇ひ堂島へつれて渡しけるかも』の一首によつて分る。「米相場師」などと云ふ短歌の音律に入れるには不似合ひな語を、作

者は相當巧みに歌ひ消化してゐるのである。詞書にもある通り大阪毎日新聞社の經濟部へ入つて、勤めのいまだ馴れない頃の途上吟である。さうしてこの歌は、歌集「輕雷集」の最初にある一聯である。かう云ふ歌から作者の最後に編輯した歌集は始まつてゐるのである。「輕雷集」の卷末記に、『私は十一月一日から大阪毎日新聞社の經濟部に入つた。最初二週間ばかり校正の見習ひをさせられ、そこで時の首相原敬氏の刺殺事件に出會ひ、さう云ふ時の新聞社内の混雜と緊張と、迅速とに對して、新米の私は、茫然と驚駭の目を瞠つたことを覚えてゐる。月末頃からは受持を與へられ、外勤へ廻された。歳暮の金融界の一入多事なのに私は途方にくれたものである。』と記してゐる。かう云ふ風であつたから作歌も従つて少かつた。

玄關に脱ぎ散らされし子らの下駄冬のこほ  
ろぎ遅く隠れぬ

玄關のあちこちに揃はずに脱がれた子らの小さい下駄の間に、冬のこほろぎが跳上る威勢もなくのろく隠れた。「冬こほろぎ」五首中の一首である。この歌は當時にあつて珍らしい題材の一つで、かう云ふ題材をも短歌の領域に生かし得る作者の技法は、多くの人の注意を惹いたらしい。寫生がゆきとどいてゐて、寸毫も間隙を見せない充實した句法なのである。作者の外面生活は非常に惶しいのであるが、かう云ふ日常茶飯事の静かさを歌ひ上げてゐる點は、恐らく作者のこせつかない氣性にもよるのであらうが、根本に於いては動じない生活力があつたればこそである。

朝なあさな玄關にわれを送る子は末娘も母の辭儀を覚えつ

雨漏りて温くしめれる壁につき冬の蟋蟀二つ居

りけり

しんみりとした歌の調子であつて、かうした作者の持味は、誰人も容易に模倣できないものである。力作と云ふのでは勿論ないが、家庭生活相の片面を

示した滋味のある作品なのである。これらの作品は郷里吟などからやはり系統をひくものである。大正十一年の作歌数は、十首に満たなかつた。

み空かぜ夜に入るかぜは吹きつげど都のた  
よりもたらす聲なし

大空を吹いてゐる風は晝も夜に入つても吹きつづいてゐるが、その風の便りにさへ東京よりくる消息の聲を傳へない。「關東大震火災」二十首中の一首である。この一聯の詞書に、

大正十二年九月一日正午ちかく大阪にて關東大地震を感じたれど、未だ大災害の起れるを知らず。ただ總ての通信機關その活動をとどめ、夜に入るも帝都の音信傳はらざるを怪しみ、人々初めて不安の念に驅らる

右の文章によつて大阪に在つて、關東大震災を感知しつつあつた、作者の心の動きと、關西地方の人心の不安を想像する事が出来るのである。さて右の

歌であるが、上句の三句は、便りの序詞のやうに使はれてゐるのだが、實際の感じとして勿論取扱ふことが出来る。「もたらす聲なし」の一句にこそ、千斤の重みを感じせしめるものがある。つまりこの「聲は、一さいの音響を示す語であり、具體的に云へば無線電話に傳はる聲さへも無いと云ふその不安を云つたもので、作者は、この歌一首だけでは感動の全部を盛りきれないと思つたか、

ただならぬ都にかあらむ天にかよふ無線電話も

言かよはなく

大きみの國のうれひの夜に入れり都のたより途

にきこえず

かういふ歌が、表現されてゐる。續いて、作者の不安は、一般人心の不安を代表するが如く、「富士山帯に地震おこり土裂けて」云々と歌ひ、グアム島から帝都の消息を知らうとして、海底線を利用したが、これも伊豆で斷れてゐることを歌ひ、

みやこべへ言かよふべく海にくがに術の盡きつ

つ途にさみしき

國こぞり電話を呼べど亡びたりや大東京に聲な

くなりぬ

と云ふ感歎となつて表現されてゐるのである。そこで又詞書を引用してみよう。

深更に至りて、偶然に紀州潮岬無線電信局へ、横濱全滅、東京炎上の短報入りし、ま、後報また斷たれて、世間再び寂然たり

まことに人心の驚きと、心配焦慮をまのあたり見る心地のする文章の勢ひである。心を集めて都から傳はる第一聲を耳に入れるべく、作者の神経は針の如くに鋭敏に活動したのであつた。

遠世よりかすかなる言を聞くごとし恐しきこゑ

に耳をうたがふ

國のうちに生きのこるこゑ一つあり我が耳にひびき大きく聞ゆ

心を鎮めてこれらの歌の内容に瞠目すべきであらう。作者は、一つのこゑを聞いたのである。その聲は、國の中に生きのこるこゑであつた。作者は、そのこゑの具體的な事實を歌つてゐないが、作者の耳にひびいた大きなこゑは、作者の全生活に沁みわたつたこゑであつたのだ。大正十二年九月二十日附の平福百穂宛の書簡は、憲吉の震災歌詠を知る上に大切な文獻である。もつとも十二年の十二月號アララギ誌上に「震災追想四篇」と云ふ文章が發表されてゐるが、關西方面に於ける人心の不安を語る一大報道であつて、一作歌者としての單なる興奮にとどまらず、作者の所謂「震災に反應して動搖する世間の經濟相を觀察せねばならなかつた」のである。やや長文に互るが、書簡の一部を左に抄録してみよう。

東京横濱の大災が微かながら新聞社に判りかけた前後は一種凄慘な氣が致しました。午後電信電話がプツリと斷れると暫くして名古屋以東の通信交通の杜絶だけは分りました。それから北陸に東北に中央線にあらゆる國內通信線を利用して見ても一向東京とは聯絡しませぬ。

更に海底電信、無線電信に、遠くは上海(?)より米國を廻る線に又は航海中の船の無線電信によつて東京を呼んでも、依然として東京は應へませぬ。もう夕方です社會部のものは飛行機士の所へ驅けつけて直接聯絡に當らうとしました。しかし飛行機は二百十日の天候を恐れて出勤を肯じませぬ。夜に入ると共に東京方面のことは益々不安で不明になつて來ました。所へ紀州潮岬の無線電信が横濱發の避難船からの發信を僅かに受けました。それによると横濱が地震のために大火災中だと云ふ事です。次いで鐵道電話が不思議にも眠りから覺めたやうに東京地方の大震災を傳へて來ました。しかし之等は眞に眞に遠い世からのやうな幽かな報せの聲です。これによつて始めて東京に異常事が突發して居ることも又あの海軍省に備つた強力無比の無線電信があらゆる通信に應へなかつた事も分り、同時に市中近郊へはケタタマしい號外の鈴を鳴らさしめました。けれども小生等は未だこれ程の大事ではないと思つて八九時頃歸宅したのです。翌曉四時ごろ至急電報に叩き起されて見

ると社員總動員の報です。また勞務搾取の社の遣方位に思つて出社して見ますと夜中宮城延焼東京全滅の報が入つた爲めに居殘社員數十名は次ぎ次ぎに各方面より入京を企て直接報道の任について出發したとの事でした。それから爾來忙しく、日々に至る酸鼻の極の東京報道記事に接して全く神経が疲れて仕舞ひました。然しこの大災事に小生は大きな新聞に居て破壊されざる全國安定の爲に働いたことは何より有難いと思ひました。當時東京全滅の報は極度に關西財界を驚愕不安に陥らしめました。而して中でも最も不安に襲はれたのは銀行です。今大阪の銀行に取付騒が起ればそれがどんな小銀行にしても波瀾は全國に漲つて日本國中の銀行は大小何れとなく一齊に閉店して國內の信用制度は全然破壊されねばならぬ運命にありました。戰時中に全國的内亂勃發を憂ふると同じく甚しい不安です。この時大きな新聞の勢力の下にその銀行のことに受持つて他社の人々を誘致して只管財界安定に努め得たことは、社會への御報じをした氣がしました。小生ごときは直

接社會への御恩報じは出來さうにない部類なのに偶然この時機を與へられたこと何よりも有難く、八日頃日銀當局より銀行の徹底的援助の聲明があつて取付騒の憂なきに至つた時はホツと重荷下りて何かに向つて感謝したい氣がしました。

以上のやうな手紙が、九月中に東京に向つて發せられてゐたのを、作者歿後の今日に至つて知る事は、震災詠に一段の光彩を添へるのであつて、鑑賞者にとつてどれだけの有難さか分らぬ程である。この手紙の文句は、永久に日本文化史の上に保存されてもいい價值のあるものである。作者は直接震災に遭つてゐないが、心一途に災害の東京を看護ることが出來たのである。さうして作者の謂ふ「大悲壯美」を感じる事が出來たのである。かの災害の驚きを罹災者のごとく共に悲しむ事が出來たのである。

郷里を離れた關西での新聞記者生活は、永い年月ではなかつたが、決して作者にとつて徒勞ではなかつたのである。匆忙な生活を二三年つづけた作者も、大正十二年の末ごろから再び作歌が多くなつていった。

朝あさの道に露けき鴨跖草やありがたく生くる  
我を思ふも

鴨跖草は螢草とも云つて藍色の細かい花を開く可憐な草である。新聞の記事によつて大震災の酸鼻の極を知つて、平靜にある阪神郊外の道を歩きながら、作者はかくの如く、何事もなかつた自分の幸福を偲んだのであつた。限りない同情を心に集めながら、遠い世の出来事を想ふやうな氣持で、日毎、新聞社へ通勤してゐたのである。かう云ふ歌が出来たころは、やや作者の心持の上にも平靜が求められつつあつたに違ひないが、日日の新聞の報道は、平靜な氣持を破らずにはゐられなかつた。

天然の深處のこゑを聞くごとし人のつくり  
し大林泉の宮に

自然の幽邃の地にゐてももの、の聲を聞くやうだ、人工のこの大きい造庭の宮

に立つてゐた。「桂離宮の歌」十五首中の一首である。大正十二年の十一月に、大阪毎日新聞社主催の美術展覽會審査に上洛した平福百穂畫伯に伴はれて、離宮拜觀をした時の作である。「輕雷集」中、この歌の後に見える「清涼殿」の一聯と對照されて雙璧とも云ふべき高雅な作品なのである。

非常の簡樸にして、驚くべき藝術的苦心の加へられた宮である。もと豊公の命により、智仁親王のために、小堀遠州が、費用、歲月、助言の三事の容喙を謝絶し、數年間一心傾倒して經營刻畫せる林泉殿亭と云ふ。前年十一月、平福百穂畫伯と共に拜觀す

かう云ふ詞書がある。この歌が發表されたのは、大正十三年である。この年から作歌がやうやく多くなつていつた。

「深處のこゑ」は、林泉に水の落ちる音がきこえてゐたのであらう。或ひは、水の音がなくとも、廣く靜かな庭を歩きもとほりながら、折々洩す話聲とも、解せられるし、全然もの音が起らぬ靜かさを、「こゑを聞くごとし」の一句によつて表現してゐるのかも知れないのである。とにかく、こゑと云はれてゐるが、かへ

つて沈黙の静かさを感じさせられる手法である。

林泉のうちは廣くしづけし翡翠が水ぎはの石に  
下りて啼けども

桂川のながるる水を引きたらひこの森の宮の林

泉はととのふ

御書院の南にひくき芝庭は日向になりて紅葉の

樹むら

池の向うに御殿見ゆれど林泉のおく此處はさな

がら寂しき海濱

茶道遠州流の祖、小堀政一の作庭になる桂離宮の大林泉は、作者の説明にもある如く、すべて生活様式の統合された築庭構圖である。作者は、この庭の構圖に驚異の眼を瞠つて、徐ろにその部分々々の自然の趣きを描かうとしてゐるのである。つつましい尊嚴な氣持を内容に藏しながら、一々作庭の妙に感慨を洩らしながら、機智的の閃きさへ見えて、巧みに歌ひ上げてゐる。例へば

『林泉のなかに屋根の寂びたる殿づくり桂の宮をたふとくなしつ』この歌などは、立體的な趣きを歌ひ、殿作りの方法が、後世人の觀賞をはづかしめないと云ふ、その技法能力を讃へてゐるかのやうである。『住む宮をゆかしく爲すに心を用ひ煩くだしきを省かざるなし』やはりこの歌も築庭法の妙趣を讃へ、た歌なのである。

この離宮の歌を作るには、作者は、丹念に豫備知識を涵養してゐるのである。しかしながら、單なる豫備知識の技法ではかうした趣きの深い歌は表現されるものではない。結局人柄が土臺となつて感動が湧えてくるものであつて、偶、百穂畫伯の同行は、作者の作歌衝動を強めたと同時に、自然の觀方の上に眞實味を遺憾なく帯びたと云ふべきである。右に引用した四首の歌の凡ならざる觀察は、讀者の眼にひろく映ずるものがあるであらう。翡翠が水ぎは石に下りるとか、桂川の水を林泉に引き足らふとか、日向の紅葉の樹群、海濱のやうに寂しい林泉とか云ふ、これらの妙味は、一氣呵成的にはなし得られぬ作者の苦心が重ねられてゐる。一言をもつて評すれば、いづれも氣品熏ふが如き

作品なのである。

いとまなき我はきたりて伊賀の野の十日の  
月に照らされてをり

仕事に追はれて寸暇なき日頃の生活であるが、偶旅にきて伊賀の野の十日の月の光りを浴びてゐる自分である。「月ヶ瀬行」二十三首中の一首である。月に照らされてをりと云ふ表現は、一步感じを弛めて月並になるところだ。作者の内に湛へる感傷味は、さう云ふところをすでに通過して、なかなかもつて洗練された感傷なのである。くつきりと人の影が野の上に浮び上つて感じられる。皎々とさす月光ではないのだが、浮彫の如く趣きを持つ。十日の月であるから餘計によいのかも知れない。月ヶ瀬は、奈良縣の北東境にある村で、古來梅花の名所として知られてゐる。慌しい喧騒の巷から離れて、獨心を愛しみながら大阪から、夜半伊賀上野に來り、月ヶ瀬に下らうとする野道を

歩んでゆくのである。

我がくだる小溪にかかれ幾つものかたりことり

と月夜の添水

夜の目にも峽の家あひ梅おほし句のこもる月か

げの靄

これらの歌は俳畫趣味とでも云はうか、どこかに通俗味が感じられる。しかし、かうした歌境は、この作者でなければ容易に生きて來ない。作者の所謂新味の詩境を展く、かうした信念が、やはりある爲であらうか、結局作者独自の歌境と云ふことになるのである。

月のまへに白梅のはなを見てすわりむかしの人  
になりぬるごとし

この歌は、「月ヶ瀬行」一聯中の逸品であらう。作者も得意であつたらしく、しばしば短冊、色紙等を書いて人に贈つたらしい。白梅の花の盛りである野は、いま月の光りに照りいだされて、まったく仙境の趣きがあつたのであらう。



月は照つてゐる、そこに白梅の花が咲いてゐる、じつと眺めてゐると、心は遠く昔の人のごとくにならざるを得ない氣持である。中世の殿上人などの梅花の宴などの光景を偲んだのであらうし、月光と白梅との配合的な雰圍氣は、そぞろに古代の生活を想起せしめたのであらう。一面、この歌は、茶室趣味のところもあつて、らうたげな歌風とも云へるのである。

山のうへは天にちかけれこぼれくる星のあかりを手にうけ照らしむ

高山の上にあると天がま近に感じられる、こぼれるやうに光る星の明りを手にうけて照らしてみる。「燕岳登攀」四十二首中の一首である。他にも優れた歌があるが、さしあたり憲吉調らしい歌を抄出してみたのである。山上は空に近いと云ふやうな觀察は、別に新らしくはない。こぼれくる星のあかりも浪漫的な言ひ方である。しかしながら星の明りを手に受けて照らしむ、と

は、一寸思ひ浮ばない技法なのである。かうした部分の異常な表現上の工夫があつて、この歌はよいのだが、嚴密の價值批判となれば、山嶽詠としての注文が、もう少しこの歌に對つて要求されることであらうと思ふ。

作者には、高山詠はこの「燕岳登攀」吟以外は皆無と云つてもよいであらう。かう云ふ意味で、「燕岳登攀」は憲吉全歌集中の異彩として取扱はれてよい作品である。この山嶽吟は、昭和二年作となつてゐるが、燕岳に登つたのは赤彦生存當時で、大正十三年七月下旬である。同行者は、森山汀川氏、中島重氏の二氏であつた。この時、燕岳から大天井嶽を経て、上高地に下つてゐる。さうして八月上旬信濃の上諏訪阿彌陀寺に開催された、アララギ第一回安居會に出席したのである。赤彦の歿後、燕岳登攀吟は完成して世に發表されたのである。

しづかなる深山を行けば都會に生きてつかれた  
る我をおぼえ來

青山のしづけき徑の物おとに我が神經のおどろ  
き易し

かう云ふ神經質的の感動を詠んだ歌から始まつてゐる。在來の山嶽詠と異なるのである。

ゆふだちの雲をひろげて雷おこれ頭のうへの有

明の山

大梅の林にとほる雨くらし稻づまは過ぐる下谷

の霧

日のくれに似て林中は雨くらし道さきに友のか

げを失ふ

山嶽詠であるが故の、堂々たらんとする意氣込みなどは、この作者は豫想だにしないのである。どこまでも自らを土臺として歌境の平靜を失はないのである。さうして作者の如何なる歌にも見受けられる、陰影の鹽梅を忘れてゐないのである。この作者に限らず現代の短歌の特長の一つは、西洋畫風の陰影の苦心を技法の上に忘れてゐないのである。かう云ふ意味で、萬葉集の歌には、容易に陰影のある歌を見出さないのである。赤彦の山嶽詠と、憲吉の

山嶽詠を對照してみると興味深いのである。赤彦の大正十三年の「燕嶽の上」の歌を二三抄出してみよう。

高山の梅の木立は皆低し肩に觸りつつ麻蘿さが

れり

山の上の梅の木肌は粗々し眼にしみて明けそめ

にけり

山にゐるわれの心は幽かなり笹の葉の露に咽喉

をうるほす

赤彦は、八月家族同伴で燕岳に登つてゐる。憲吉は、七月に登つてゐる。季節は同じ夏である。場所も大體同じである。時刻が兩者の歌には相違があるが、大體同じ徑路を歩んでゐると觀ていい。瘦身な憲吉の山嶽登山に刺戟され、赤彦も燕岳に登つたらしいとも推察される。赤彦四十九歳、憲吉三十六歳であつた。憲吉は四十六歳で歿したが、この登山詠の時代を中心として兩者の年齢を考へ、赤彦の登山詠のたちまちにして發表され、憲吉の作歌は、前に

も述べた如く、赤彦歿後であつたことなどが、藝術上の問題として考へられる。赤彦の歌には明るさがあるが、何か人生觀的の閃めきを籠らしてゐる調である。憲吉の歌は、山上に於ける自然觀を確立しようとする様々な工夫が詞句に互つてめぐらされてゐる。さうして特異な歌境が生れてゐるのである。赤彦の歌ほど明るくなくて、人生觀的のものではなくて、むしろ作者の神經の動きが、自然現象の中に融合一體とならうとする歌境である。赤彦の歌は晩年にさう遠くないのであるが、憲吉の歌は、晩年にはいまだ十年の年月のへだたりにある。山上を歩きウキスキイを飲んだりして英氣を養つた憲吉は、いまだ老成を見ないのであるが、その當時發表されないのである。赤彦の歌との比較論をここでするのは物足りなさを覚える。赤彦よりも作歌數も多いし、細かい自然の觀方をやつてゐる。技法上の點から考へれば、赤彦の直截な句法と違つて、可成り變化を試みながら山上の趣きを傳へようとしてゐる。

雨にぬれ雲にぬれたる岳のうへの石楠花畑に鴉  
飛びたる

雲はやくつばめが岳を吹くみれば山もみ空を翔  
るかと思ゆ

なかなか工夫を凝らした表現である。雨にぬれ、雲にぬれなどの技法を學ぶべきである。山が空を翔るやうだと云ふのは別に新らしくはないが、これらの句調を生かすに、上句は相當苦心が拂はれてゐるやうだ。

朝づく日とほく峯上を照らし來て我がかけふか  
く谷に落ちむとす

山のうへはほがらに晴れし朝となり天のはらよ  
り風吹ききたる

山上の朝を歌つてゐて、申分ない程山上の霧圍氣が現はれてゐる。又感慨の細かさを覚えしむる。藤澤古實氏の歌集「國原」の大正十一年「赤石山脈縦走」の一聯の中に、

ひむがしに夕暮るる富士や吾が立てる赤石山の  
陰のびにけり

かう云ふ歌があるが、山上に佇立する人の姿と山の陰影が極めて印象的で調子も伸びやかである。「赤石山脈縦走詠」の中には優れた歌が多く、山嶽詠として模範とするに足りる歌が多い。蓋し「國原」の山嶽詠の偉觀は現在に至つても、諸先輩の山嶽詠を凌ぐほどの價値を保持してゐる。「國原」の山嶽詠は、憲吉とて作歌上の刺戟を受けたに違ひない。憲吉に限らず、現代の作歌者の中に「國原」の山嶽詠のやうな線の太さを表現なし得る人の稀有であることを、ここで序でを以つて一言申添へておく。

いとまなき人もあそびて飯食せり紅葉川原  
に洋服の父子

日々の業務に暇もない人も遊びに来て飯を食べてゐる、紅葉する川原に、洋服を著た父と子も見える。「高尾遊草」十七首中の一首である。「楓林世態」と詞書があつて、京都高尾の清瀧川沿岸の楓林に作者は遊んだのである。作者と

ても當時暇の無い生活をしてゐたが、「いとまなき人もあそびて」は、多分に作者の心持も加はつた表現なのである。この歌は、秀作と云ふのではないが、楓林世態と云ふことを念頭に置いて考へれば、風俗繪卷物を見るやうな趣があつて、柔らかみのある筆致と云ふやうな感じが興へられるのである。「酒宴人しぐれに濡れて興つき」楓林のなかに三絃唄のこゑ』スケッチ風な歌であつて、別に内容に重々しいものはないのであるが、作者はそれを意識して詠んでゐるやうだ。「楓林の人ごみのなかに獨逸語きこゆ外人をつれて教授らしき人」これらの歌も、現代人らしい機智に富んだ表現で平面的な描寫とも云へる。「掛茶屋を輕疹のをんな通ひをり楓林の繪にかくべかりける」作者の念頭には、繪畫趣味があつて、先づ高尾の通俗的な感動を歌つたのである。連作の方法として、かうした試みは、この作者の一手段のやうである。「比叡山」の歌にしても始めの方では、風俗畫的な觀察をしてゐると同一の手法である。これらの歌の次ぎに、

西方の徧照光にうやうやしく向ひて古りぬ山の

うへの寺

この歌は、神護寺で詠んだのである。詞書に、『山上寺は、弘法大師の賜うて永日修法所とし給へるもの、中世文覺上人之を再興す』とあつて、作者はかりと心氣を改めて山上の寺に詣でてゐる。夕日を、徧照光と云つたのである。所謂觀無量壽經の光明徧照十方世界である。作者らしいつましい氣品のある歌で、「山のうへの寺」と名詞止にしたのも落著いてゐて餘韻が籠る。

夕映に諸佛莊嚴しよぶつしやうごんされてゐる國を戀ひにき雲のあ

なたに

夕映が遠空に赤く染つた光景を、その遠空の下にある國が恰も諸佛が飾られてゐるやうな思ひがすると云ふ。金鈴の響きが雲間にきこえてくるやうな歌である。「されてゐる」と云ふ口語的發想にも無理がなくていい。次の「地藏院觀楓」の一聯には、

入りつ日はつひに染めつつ一めんいに谷の紅葉に

燃え付きにけり

谷一めんいの紅葉に夕日の光が染つた、それを燃え付いたと云つてゐる。いかにもその通りであつたらう。一步誤まると輕薄になる句法だが、つましい作者の感動は、かうした大膽な手法をも自然に生かし得てゐるのである。高尾から又作者は梅の尾おしに遊んでゐる。

山寺の夕べはわけて心澄め谷川の音を聖人ひじり

きかしき

山の上にある寺は、夕ぐれとなればとりわけ心が澄んで、谷川の音を聖人は聞かれたであらう。「梅の尾寺」十首中の一首である。梅の尾寺は、高山寺で、明惠上人の再興した寺である。作者は、晩年に近い頃、明惠上人の徳風に歸依して、上人の遺風の研究を志したが、しかし覺書程度の研究に止まつて、纏つた研究論文はみられなかつた。明惠上人の和歌に就いての意見は、憲吉流の觀方もあつて徹底してゐた。『我れつひに世にわづらひて靜しづかなる生いきのねがひに

難かりなむか』この述懐は、當時の作者にありさうな事であるが、作者の心中は、あるひはかくの如き静かさに一時たりともあり得たのではあるまいか。歌の上に現はれた感慨は、佛法の求道の精神のやうであるが、作歌者としての憲吉は、生涯のうちにあつて、偶、明恵上人の氣風に心を集める事が出来たのであつて、この一つの信仰対象を覓め得られたと云ふ事は、いづれにしても人間の生きて行く上に、大きな幸福でなければならぬ。しかしながら、憲吉は、この幸福を一步深く考索すべく、上人の研究に心が動いたのである。藝術上の問題から上人の和歌を批判すれば、憲吉にとつては、さう驚きの眼を瞠らなくともよささうであるが、上人の日常行爲に至つては、到底比較にならない生活上の相違が感じられるのである。これは現代人として當然な考へ方であるが、煩瑣な現代の社會生活の上に關心を持つ人々にとつては、上人の行爲の中に、現代人の求めてゆく一つの静かな人間味を發見した時、このよろこびは譬へやうもないものであるから、心の休み場所として、作者は、上人の和歌に目を付けたのであつた。これは、歌人としての憲吉を重からしめたであらうか。私

は思ふ、作者は、作歌者として糧を上人の歌から攝取しようとしたのではあるまいか。とかく古來僧侶の歌は釋教歌であつて、理りが多くて鼻もちのならぬものが多い。その中にあつて、明恵上人の歌には、作者をよるこばしむるに足りる歌があつたのだ。まして聖僧の聞え高かつたその人を想へば、作歌者の己惚れを捨てて上人の生活態度を省みたのであらう。

大うちの白砂庭へひびきゆく我がしはぶきを  
を憚りにけり

大内の白砂の庭へひびいてきこえる自分の咳を憚つた。「清涼殿」二十三首中の一首である。詞書に『十月十九日。平福百穂畫伯に伴はれて拜す』とある。單にこれだけの一首を引用しただけでは清涼殿の歌の趣きを讀者は感じられないであらう。ただこの歌から感じられてくる謹嚴な作者の態度さう云ふものを又省みながら清涼殿の特長を掴んだ技法の巧さ、もの静かな

禁裏に、作者は微かなものの音さへ氣にかけて歩いてゐた。その様子が、この歌の大きい特長なのである。さうして清涼殿らしい感じを、この一首の中に作者は集めてゐるのである。

清涼殿の階はしをのぼりて鳴板なりだての音こととするに足  
をおそれき

通りゆく身をつつしみぬ御帳みぢやうよりもし咎とがめても

聲やしたまふ

櫛くしがたのとなりの窓にくすと笑ふ人あらじかと

今もうたがふ

一種のもの靜かさを現はさんが爲の意圖さへこの歌から感じられるが、理りに落ちてゐないので句法が極めて自然にひびく。古の殿上人の生活状態などを想像しながら、自己の氣持にそれを結び付けてゐるなど、用意周到の感が深いと思ふ。

さやりなく御夢守みゆもりりけむ御みとばりのそとの四隅

に夜々の御みあかし

人すまぬ匂におひ古りゆく大宮のうへの局つぼねの二間ふたまのく

らさ

乏しやくしかる燭しやくのあかりに慣れたまひ生なまひたまひけ

る明治帝思ほゆ

清涼殿の落敷おちしきに下りて振りあふぐ時雨のそらに

大きな簷のき

平安朝時代の物語の中へでも出て來さうな風趣であつて、恐らく作者も、それらの物語の中に出てくる殿上人の生活様式などを特に心の上の参考として研究してゐたであらう。優れた作歌技能が感じられるし、磨かれた玉のやうな氣品もある。「桂離宮の歌」の一聯とこの一聯は「輕雷集」の中の偉觀である。同行の百穂畫伯の歌を参考のために左に記しとどめておく。

殿上でんじやうの櫛形窓くしがたままに人影にんげいのありし昔をしのびつるか  
も

み帳臺の帳垂れたるみ前にし胸高に踞る木彫の  
狛犬

大宮の御所の間毎の奥ふかみ世のもの音きこ  
え來ぬかも

同じ境地を見てゐながら、兩者の歌の句法斡旋の異なるをみるべきである。態度の奥の方に同じものが胚胎してゐるのだが、表現されたものは、かくの如き調子の相違なのである。

しばしばを暴風雨のとまりや海のうへに追  
ひくる賊や土佐旅日記

度々の暴風雨に遭つて船を泊てるが、その船を襲つてくる賊がある。かう云ふ記事を書きとめられてある土佐旅日記である。「土佐泊」五首中の一首である。紀貫之の土佐日記を思ひ浮べて、作者は阿波の鳴門村の南端土佐泊浦

に來てゐたのである。土佐日記は、紀貫之が、承平四年土佐國守の任が終へて、京都へ歸るときの紀行文であるが、作者も詞書で引用してをる如く、『年ごろを住みしところの名にし負へば來よる浪をもあはれとぞ見る』の歌があつて、次の文章に、『三十日。雨風ふかず。海賊はよるあるきせざなりとき、夜中ばかりに舟を出だして、阿波の水門をわたる。夜なかなれば、西ひんがしも見えず。男女、辛く神佛をいのりて、この水門をわたりぬ。』と見える。阿波の水門は、鳴門海峡である。海賊に恐怖する人心が巧みに描かれた文章であつて、作者は、かうした文章を書き綴つた紀貫之に同情して、

土佐守任はてて兵をつれざれば海にあだなふ賊  
に追はれつ

かういふ歌をも詠んでゐる。任が終へて紀土佐守は歸京するのだが、兵を連れてゐなかつたために海を荒し廻る賊に追はれたと、詠歎してゐるのである。「土佐泊」の詞書には、『尙ほ土佐日記によれば、任中嚴伐せる海賊の報怨をいましめ、此處にても夜行阿淡の海をわたりて禍をさけしとなむ』と記して



る。

阿波の海に潮立ちそめぬ打ちいでて淡路島  
を見れば磯もしら波

阿波の海に潮が寄せてきた濱べに立ちいでて淡路島の方をみると、磯べは白波が寄せてゐる。「鳴門潮瀾記」六十首中の一首である。大正三年あたりの句法に、「なぎさ潮さる」落し「波」等の結句があるが、明治三十九年の長塚節の歌に「沖邊は闇し磯は白波」の用例をみることができる。これらの歌の新しきは、結句が獨立してゐて、必しも前句よりのつづき具合を顧慮してゐないのである。そこに讀者の視野をひろく展開せしめるだけの効果が擧げられてゐる。萬葉の『田兒の浦ゆうちいでてみればま白にぞ富士の高嶺に雪は降りける』には、句法として一直線にひびいてくるものがあるが、憲吉の歌には、打ちいでてと云つて、見ればの間に淡路島が介在してゐる。ここに複雑味が感

じられる。萬葉調もかう云ふ邊の變化があつて、移行して來た譯である。

波立ちて鳴門をいづる春しほのひろがりとはき

海となりぬる

この歌の「ひろがりとはき海となりぬる」には、非凡な味ひがある。つまり海を知ると云ふ概念の上に立脚して、海原のひろさを感じさせてゐるので、「なりぬる」の説明的な云ひ方が少しも経過の報告にとどまつてゐないで、海の狀態が自然にはつきりとしてくるのである。

迫門山の小松にさやく風出でて潮のながれのは

やくなる音

「潮瀾俯觀」の歌である。小松に風が騒ぎだして、海潮の流れが早くなつて來た音が聞えてくると云ふ、心が澄んで、聽覺がはつきりとしてきたらしい人の姿が見えるやうだ。さうして、

淡路の伊賀利山にもひびけやも鳴門の潮のおと  
の大きさ

いよいよ神経は冴えて、潮の音を現はさんが爲の苦勞は重ねつくされて来て、伊賀利山にもひびくと強調してゐるのである。しかして「夕渦潮」の歌に至つては、

鳴門の岩瀬が塞きし海ばらは二段になりて落ち

て居りぬる

迫門ぐちは潮瀬に水の擦り合ひて湧く渦のあり

巻きてながれぬ

かういふ細かいところまで、こんどは音でなくて、視覺の鋭さを示さうとしてゐるのである。ここで私は「阿波の鳴門と中村憲吉氏」の一文を草された、小西英夫氏の鳴門觀の一節を拜借したいと思ふ。

實際ほんたうに鳴門を觀るのには、潮の満ちきつたおだやかに若布刈のかんこ船が水棹を光らせるころから、干潮時に入つて阿波と淡路の兩岸の岩にしら波がそそげだち、それが刻々と中瀬へ寄り合ひ白布をちぎつて流したやうになり、いよいよ瀬戸の内海と紀伊水道に落差が見え潮鳴

がとどろきとなり、内海から出る船が瀬へ向つてゆるやかに来て、一瞬瀬の波のうねりに呑み込まれて、上から觀てゐるものの眼に全く入らなくなり、沈没したのかと思ふとはるかに下つてぽつかりあたまを出し、それから大渦小渦にあやつられてたゆたひ乍らはるかに沼島の方へ消えてゆく壯絶の觀を見て、更に再び満潮時に入つてシャツターがしぼられる如く瀬を消ししら波を碧に消してなんでもなかつたやうに水が一線となる、その瞬々動く大景觀をゆつくり見てそしてここに一夜を泊つてしづかに枕に潮鳴りを聴くことによつて鳴門を眞に味はふことが出来るので、平面的な風景を見るのと鳴門は全々おもむきを異にしてゐる。

以上の小西氏の文章を味つて、憲吉の歌を味ふと、鳴門の景觀が一層はつきりとして来て、鑑賞者に甚だ参考となる。作者も當時、小西氏の意見をおそらく坐談的に聞いてゐたかも知れぬが、作者一流の觀察の細かさは、先づ鳴門の潮瀬を意識しつつ、さういふ上に立つて自己の感覺を飽くまで活動せしめ、容易に感じ得られぬものを把握しながら、鳴門全體の大自然を歌ひ上げてゐる

のである。鳴門の歌は、歌壇では、川田順氏の歌もあるが、憲吉の歌は、あるひは、川田氏以上のものを顯現してゐると云つてよいであらう。奔放自在、さうして體を崩さず三十一音律の中に自然の諸相を傳へてゐる力作である。

かしこくも申さば此處の假宮は幼みかどの  
飯ごとの宮

恐れ多いことであるが例へて申上ぐるならば、この假宮は幼帝の飯事をされて遊ばれた宮のやうである。「裏淡路の旅の一聯のうち」竹島十一首中の一首である。詞書を引用してこの歌の意味をはつきりせしめておく。「竹島福良の湊に竹島と云ふ周圍四町ばかりの小島あり。壽永の春平家一門一ノ谷より落ちて暫く據りしと云ふ。島上には安德幼帝の行在所跡、敦盛首塚などと傳ふるものあり」云々。この文章によつて分る如く、この歌の内容はこれだけのものであるが、かう云ふ風に懷古の情を素直に歌ひ上げられるのは、實

にこの作者の天成である。この歌の背景には綿密な調査がゆきとどいてゐて、つまり歴史的事實を深く研究し、さうして古への感情を自分に喚び起してゐるのである。

島山の磯の海にはあまた散り椎の古葉が浮きて  
神さぶ

この歌も、古風の景色に深い親しみを感じてゐる、靜かな作者の心が思ひ浮べられる。かくて福良灣の磯邊に立つた作者は、

假宮に坐せしみかどと思ひ出れば月夜の磯に竹  
島が見ゆ

と歌つてゐる。

寝ねがたき福良の夜半に月見れば平家こもりし  
灣しづかなり

福良は、兵庫縣三原郡にある町であつて、淡路島の南西、鳴門海峡に面してゐる。都を落ちた平家一門が、一ノ谷の戦ひで破れ、この福良の町に哀れな姿を

とどめてゐたのである。おのづから感慨なきを得なかつた作者は、敗戦の平氏一門を偲んで歌を作つたのである。

山寺に來てゐる今日は香華かうげして思ひを致す  
はるけき人に

山の寺に來てゐる今日の日は、香華を手向けて故人の靈に思ひを馳せる。「比叡山夏安居」の十二首中の一首である。詞書に『比叡山上寺にアララギ歌友と籠ることあり』とあつて百餘人の歌安居會である。この時作者は、記紀の歌謠を講義した。赤彦は人麿、茂吉は催馬樂、麓は古事記を講義した。午前四時起床、電燈の灯で講義をきいた。山上宿院の家屋の上を、時鳥が啼いて過ぎた程、この當時の比叡山上は幽邃の趣きが深かつた。この歌は詞書にもある通り、アララギ故人の冥福を祈るための追弔會を山上大講堂で行つたときの歌である。法要の式は略されたが、古き法華懺法であつた。

磬けいをうつおと稀まにすれねむり足らぬまなこに向  
ふ御燈みあかしのゆれ

磬は、誦經の際に、架に懸けて導師が撃つて鳴らすもので、「うちならし」ともいふ。眠り足らぬのは作者ばかりでない、みんな眠り足らはなかつたらしい。酒類禁斷であつたこの會は、酒を好む作者にとつては、問題であつたらしい。赤彦の得意の時代であつて、會の動向は、赤彦の精神に負ふところが多かつた。赤彦は、『大衆の多くゐねむれる講堂をめぐりておこるひやくしのこゑ』と歌つたが、歌壇人は當時謂つて曰く、アララギは比叡山に籠つて天下に號令したと。これはとにかくとして、この時のアララギ歌會は舌端火を吐く勢ひがあつた。一學生は、頭に鉢巻して寫生論の質問を發し、茂吉山人は満面朱をそそいだやうになつて、その寫生論の質問に答ふるなど、歌界稀に見る緊張した歌會であつた。比叡山詠の大作を過去に持つ憲吉は、悠然として構へるところがあつたらしかつた。

眞夏日の照のちまたに身ひとつを行きしひ  
たげて悲しきわれは

眞夏日の光が強く射す巷を厭はずに一人歩みつづけてゐる自身が悲しまれる。「晩夏」八首中の一首である。身を虐ぐは、多忙な生活の無理を押し切つた状態を云ふのであらう。

ひと夏をうつつもなくて働きし疲をふかく身に  
もつとおもふ

これらの歌をよめば、生業に疲れてゐることがすぐ分る。

上衣ぬぎ椅子にかけつつなほ暑しつかれ過ぎた  
り我のからだは

かう云ふ歌境もあつて、いかに作者の生業の暇の無かつたかが想像される。業餘吟として上乘の作であるとおもふ。

初めの歌の「悲しきわれは」の感傷味こそ憲吉の持味であつて、この句法の自然さを赤彦はかつて讃めて居た事があつた。苦心して成就した句法でなくて、不意に現はれた句法であらうが、息ふかく呼吸する作者の姿が偲ばれてくるのである。

御父として初めて御子のこゑ聞かす大御胸  
思へば海きく如し

御父君とならせられ初めて御子のこゑを聞かせたまふ御心を思ふとき、その限りなき喜びは海のひびきを聞くやうである。「奉祝皇孫女御誕生」十三首中の一首である。第一句の六音は、少しもわざとらしさがなくて、むしろ謹直な感じを受ける。海きく如しの平凡ならざる佳句に注意したい。若山牧水の明治四十一年の歌に「黒き海聴く」の句が見えるが、牧水の處女歌集「海の聲」に收められてある歌であつて、海の聲などと云ふ云ひ方は、新體詩あたりの影響であらうか。祝詞あたりの一章にありさうにも思へるがどうも無いやうだ。

國內舉つての皇孫女御誕生のよろこびの聲は、あたかも潮の如く満ち満ちたのであつた。大村吳樓氏の言葉をここに引用するならば、『大正十四年秋、照宮内親王御生誕に際しては非常な力作であるあの奉祝歌（輕雷集所出）を大阪毎日へ發表されたが、時日が経過した後では効果が減殺されるので畏れ多いが皇子様、皇女様兩様の謹詠が豫め用意されたのだつた。』と云ふ経緯があつて作歌したやうである。作家として屢用ふる手ではないが、當時は、すでに技法の點にあつては融通無碍のところがあつて、自ら確信するものがあつたらしく、これは短歌といふ藝術に對して、絶對の信頼を置いてゐた所以に他ならない。

天つ日の御女と現れさし國ばらの黄葉がうへに

匂ひたまひぬ

日の朝庭榮ゆく代かも御祝もち四方の國より使

のかよふ

萬葉のある種の歌のやうな古風な味ひと、近代的な感覺の閃めきは、停滞な

い調となつて迫りよるものがある。一般的な感じもあり、さうして犯し難い氣品を持つ作品である。二首目の歌の結構などは、日本書紀あたりの文章の一節に出てくるやうな趣きがある。

作者は、再び『皇孫内親王御降誕に寄せ奉る』の詞書を附して、『河水清三章』と題する歌三首を作つてゐる。以前の作歌態度に何か感ずるところあつたのであらう。かう云ふ點が、如何にも謹直な作者らしいのである。

冬さりて御國の河は落葉せず日の大御孫の産湯  
に足らふ

まことに麗しい聲調のゆたかな歌柄である。容易にこれだけの技法は生れない。

初日かげ雪ににほへる山峽は霧を生みゐる  
河なかの岩

初日の光が雪に匂ふやうに照りかがやく山峽には、谷川の岩の間から霧が立ちのぼつてゐる。「雪谷川」三首中の一首である。故郷の元旦は、匆忙な生活を常に營んでゐる作者の眼に、永い間山河に親しんでゐた経験も加はつて、かう云ふ原始的な感じのする歌境を創造されたのである。

夕づける海路よ見れば陸山に雲さむく寄り  
てたむろせりける

夕ぐれの迫つた海から見ると、陸地の方にある山に、雲が寒さうにかたまつて動かない。「紀州灘航行」三十一首中の一首である。詞書に、『船上 大正十四年師走なり。明けての年には障なく職を辭しなむと思へば』とある。この一聯は、「船上」「有田沖」「白崎」「比井」「御坊の濱」「鹽屋浦」「荒灘の落日」「綱不知灣」「白濱」等の幾つかの歌からなつた大作である。ここでも作者の友人、金谷倭四郎氏の文章の一節を拜借しておきたい。

大毎在社中、大正十四年の暮から、中村は私の郷里紀州の白濱温泉でしばらく家族とともに滞在致しました。彼から白濱へ行きたいからと通知がありましたから、私は早速郷里の實家へその旨を申してやつたのですが折返してささやかな家ながら新築の家を提供するからとの返事でした。中村は暮から一月の半ば近くまでそこで滞在しました。中村が引揚げました後に實家の店員が後片付けに参りましたら、臺所には酒の空壇が所狭く林立してゐて、呆然としましたさうで、その話を聞きまして私達は腹を抱へて笑つたことでした。

金谷氏の文章には、この作者らしい面影が語られてゐて懐かしい限りである。妻子をつれて紀伊の旅に立つた、その心の裡には、もはや匆忙な業務を辭す考へがあり、そこに再び新たなる生活の轉換期を豫想するところがあつたのであらう。旅の喜びと、友情に感謝した作者は、擅に旅の自然を満喫したことであらう。その通り自然の諸相を歌ひ上げてゐるのである。右に録した歌は「荒灘の落日」中の一首であるが、視野が遠く展けて、作者の眼光は、じつと夕

べの雲にそそがれたのである。次の歌で分る如く、夕映の光がとどかない陸地の山が暗くなつてゆく光景である。

海原うなばらのはたてに沈む日のかげは己しが大きな形かた體ちにて暮る

太陽自らの形體をかくの如く表現するうまみ、これは、自然の相に參入した微妙な技法と云へる。己れ自體の姿のままに沈んで行くといふ大景である。

眼まなかひの海俄かにくらし入りつ日はつひに白くぞ燃もえて落ちぬる

源實朝の歌に

紅くれなゐのちしほのまふり山のはに日の入るときそらの空にぞありける

「ちしほのまふり」は「血に染る」意であるが、憲吉の歌と比較してみても、兩者の持つ力強さは、相譲らぬものがあり、一方の歌は、入りつ日が白く燃えて落ちるといひ、一方は、入日の空のま赤く染つた印象であるが、いづれも非常に感覺の

鋭さを思はしめる。白くぞ燃えると云つても、太陽の赤い相は依然として讀者の眼底に残つて鮮やかな、落日の極まる光が想像される。

眞夜まよなか中も身體みにのこる湯のにはひ松風まきき  
て起きるたりけり

深夜身體に湯の香の残つてゐるのを覺えて、松風の音をききながら起きてゐた。「紀の湯」一聯中の「如夢庵」六首中の一首である。靜夜獨坐と云ふ感じであるが、偶、松風の渡る音が聞えて、一入靜かさは身に沁みるのである。赤彦の大正十一年の歌に、

野分のわかすぎてとみにすずしくなれりとぞ思ふ夜半よなか  
に起きるたりける

赤彦四十七歳の時であつた。憲吉の歌は、大正十四年から十五年の正月にかけて作つた歌であるから、大正十五年とすれば三十八歳の時であつた。か



うして兩者の歌の内容を検してみに、赤彦の歌に重厚味が感じられる。憲吉は、赤彦のこの作歌年齢に至らずして歿してゐるのであるが、やはり年齢の差は、争はれないのである。しかし、憲吉には、赤彦の容易に至らないものを他の方では完成してゐるのであるから、その點は、年齢は問題とならなくなるのである。憲吉のこの歌の場合にあつては、あまりにも恵まれた環境であつたとも云へるのである。赤彦の歌の生活力、憲吉の歌の生活力、かう云ふ點に論ずべき重要な問題が含まれてゐる。人間同志の生存上の息衝ひのちがひが強く知られてくるのである。

下濱したはまに太平洋たいへいやうの波なみなごむらし心こころしたしき音ねはき  
こえぬ

「下濱」は、憲吉の宿つた如夢庵から下つてゆく濱を云つてゐるのであらう。「如夢庵」は、金谷氏に據ると「如無庵」であるさうだ。作者はこの如夢庵が大變に氣に入つて、どの位ゐるこの庵の静かさを感謝してゐたか知れない。「今宵このよやどる旅たびのやどりに活けたるは紀伊のみ冬の山つつじ花」『夜旅よたびしてつきたる庵

にわがために焚かきのこされし香かぐのうれしさ』先づ數百言の説明よりも、これらの歌の内容をよめば、作者の歡喜が想像されてくるのである。茅屋の下で野分の音を聞いてゐた赤彦の環境と頗る違ふのである。

さて太平洋の歌であるが、太平洋と云ふ詞をうまく消化してゐるのがよいのであらうが、やや、「なごむらし」「したしき」あたりの語の二つ使用されてゐる點が小刻み過ぎはしまいかと思ふのである。太平洋の歌がもう一首ある。

初日はつひかげ濱なみにほへど波なみはるけき太平洋たいへいやうのうへ  
になほ朝あさの月つき

海濱うみづみ歲旦としごひの歌である。和なごやかな氣分の横溢した歌風である。「元日よわんじつの太平洋の浪なみよく晴れて濱を吹くかぜ朗はつらにながし』いづれも太平洋を詠み込んだ歌としてある新らしさがあつて、作者の持味が出てゐる。しかし、特に力作と云ふのではないと思ふ。妻子らと暮らしかう云ふ歌を作りながら紀州白濱しらすにあつて年を迎へた。これが家族との最後の長い旅行であつたのだ。

うちつづく春さむくして信濃なる友のやま  
ひのたのめ無きころ

毎日々々春の氣候が寒くて、信濃の國に居る友の病のはかばかしくなくよりどころの無いころだ。「水取祭七首中の一首である。『大正十五年早春奈良にきたることありて、二月堂水取祭を見る』とあつて、この歌の出來たのは、赤彦歿後、昭和三年であつた。大正十五年(昭和元年)の三月十三日の日記をいまここに引用する事にする。

十三日。雨。暖。

○朝アララギ選歌。○退社後奈良へ行く。(昨夜行くつもりなりし)柳茶屋(猿澤池上、茶飯)にて夕食せんとてよりきけば、水取は昨夜済、今夜も炬火は八時ごろと云ふ故急ぎて、食事は後として、車して詣る。二月堂にて赤彦の病を祈り、しばらく參籠。(炬火は石段をのぼる時に終りたり)茶飯茶屋にかへる。(九時)歸宅は十二時。

赤彦の病を心配する作者の厚い友情は、よくこの日記の文面の上に看取出來る。

おろかなる益をたのみて御ほとけの加持香水を

友のために貰ふ

赤彦の歿後でなければ發表できないやうな歌である。この歌が、當時早速に出來てゐたにしても、發表なし得ない焦燥の氣分にかられてゐた事と思ふ。右の歌に關聯した作者の、赤彦追悼文の一節を引用してみよう。

恰度三月十三日御水取祭の終る前夜、私は奈良に行くことがあつた。炬火の散り残つた二月堂の高樓で、私は赤彦君のために燈明を獻じ、御香水と御守札とを頂いて信州に送つたが、これは加持祈禱の意味と云ふよりも、寧ろ暗然に命數の迫つたことを赤彦君に自覺を促したい氣持からであつた。

\*

私は赤彦君の顔を見て、はじめて實に驚いた。黄疸の色は、顔面はもと

より胸へ手へかけて、その巨きな眼のなかまで染み入り、さらに頭髮のなかへも及んで、さながら黄色の世界から出て来た人のやうに變りはててゐる。元來赤彦君の額には、特徴のあるふかい横皺があつて、顔も丸味を帯びた貌にちかかつた。しかるに今は顔面は長みを帯びて肉も落ち、額の豊皺は消え失せて、その代りに、晝夜不眠久しく病苦と闘つた痕跡が、縦に斜に刀傷の如く、幾條にも錯雜して引かれた皺となつて残つてゐる。如何にも忍苦そのものの象徴のやうに、また苦痛を喝叱してゐると見えるその相貌は、自ら人の心を凄壯な氣をもつて撃たねば止まないものがある。しかしその病苦の惡闘を偲ばしめる、緊張した顔貌のうちにも、よく見ると、赤彦君が心のなかで、遙かなるものを見守つてゐるやうで、一種の不思議なゆとりと、和ぎとが潜んでゐる。これは肉體の苦痛を強く征服してゐる赤彦君の精神の餘光が、その影をさしてゐるのかも知れない。右の文面に現はれた、憲吉の赤彦觀は、あたかも彫像を思はしむるやうに、病床の赤彦の姿が描きつくされてゐる。永い間の藝術上の友であつた、その一

人が、永久にこの世から去つて了つた寂しさは、どう考へてみても沈痛の思ひしか残らなかつた。赤彦の死と共に、作者の短歌に對する態度は、一層に眞劍味が加はり、又一方に於いては、作歌を繼續していく上に、一種の物足りなさを感じて来たのは事實らしい。しかしこの物足りなさは作歌上の萎縮を意味するものではなくて、競争相手を失つた寂しさである。自然の觀方の上にも、おのづから改めるものがなくてはならぬ。かくて作者は、赤彦生前のうちから、故郷への歸住は定まつてゐたらしいが、自然と歸住の精神は動いていつたやうだ。

世のなかに我が友死にてしづかなる思<sup>おも</sup>をの  
こす<sup>こと</sup>今年の春や

この世の中にもはや自分の親しみ合つた友も死んでゐないのだと云ふ靜かな思ひが残る今年の春である。「鉾池山莊」七首中の一首である。松の花粉

がしきりとこぼれる自分の家の庭を眺めながら、うら寂しい氣持に浸る、それがこの鉾池山莊の一聯の中によく現はれてゐると思ふ。この家に住まふのも後わづかなのである。すべて生活の變化は、單なる詠歎の中にも、何か一くぎりの感慨を自然に齎らすものらしい。

戸を練りて間もなき縁におびただし松の花粉の

吹きたまりたる

鉾池の大松原は息づくか池いちめん花粉を敷

きぬ

技巧的な詞の驅使のみではなくて、これらの歌の内容には、何か作者の息づかひが感じられる。いままでの作者の歌には、よく歌ひ消化した天成的な巧妙さが歌の隨所に感じられて、所謂自然描寫の高さが感じられてゐるが、昭和の年に入るに従つて、先づ赤彦歿後とみてよいであらう、何か深いものを内容に持ち始めてきたと云ふ感じである。「林泉集」の初期の歌に、戀愛を感じながら詠んでゐる歌に、ただならない調子が感じられてゐたと同じく、このただな

らぬ調子は赤彦歿後に至つて見逃し得ないものとなつて生じてゐるのである。これは當然さうあるべき筈のものである。大正十五年(昭和元年)四月に新聞記者生活から退いたのであつた。

雪に餓ゑて鳥おほく里にいでにけり子供の  
手すら易くとらへつ

雪が降りつもつて拾ふ餌がないので餓ゑた鳥が多く里へ下つて來たが、子供は手でそれを易くとらへてしまふ。「雪國雜題」八首中の一首である。赤彦の歌に『雪降れば山よりくだる小鳥おほし障子のそとに日ねもす聞ゆ』とあるが、大正八年の作である。赤彦の歌では、雪に餓ゑて、と云ふところを、雪ふれば、と客觀的な表現をしてゐる。憲吉の歌になると、主觀的な云ひ方によつて、里へ小鳥の下りてくるのは、雪が降つて餌がないからだと理つてゐるのである。憲吉の歌の場合にあつては、雪國の貧しい村人の生活を歌はうとする

大體の心構へがあつたのである。この一首の前後の歌を知ればそれがよく分る。赤彦の歌の場合にあつては、里を下つて来て終日外に啼いてゐる鳥の聲に静かな感じが與へられたのであつて、そこに兩者の歌の觀照態度の相違が見える。大正八年は、赤彦四十四歳、昭和二年は、憲吉三十九歳であつた。

雪ごもり倦<sup>あ</sup>勞<sup>ぐ</sup>みて村の札<sup>ふだ</sup>付<sup>つき</sup>者がまた手<sup>て</sup>博<sup>あ</sup>奕<sup>そ</sup>をは

じむるらしき

降りやまぬ雪に稼<sup>か</sup>げず村びとのたれかの家は飯<sup>いひ</sup>

に餓<sup>う</sup>ゑなむか

子<sup>こ</sup>らの行く學校も雪にやすみたり朝<sup>あ</sup>餉<sup>さげ</sup>に餓<sup>う</sup>ゑて

くる學<sup>ま</sup>童<sup>どう</sup>ありとふ

かう云ふ歌を引用してくると、小鳥の歌の持味が一層光つてくるのである。なぜ作者は「雪に餓<sup>う</sup>ゑて」の語を使つたかが領解されてくるのである。これらの歌は、貧しい村人の内生活へまで作者が飛び込んでいつた歌ではないが、雪國雜題に相應しい小品の趣きを意識してゐたらしいのである。

山なかの大<sup>おほ</sup>禪<sup>ぜん</sup>寺<sup>でら</sup>のおく谷は植<sup>う</sup>田<sup>た</sup>のあるが物  
しづかなる

山の中の大きい禪寺の奥谷に植田があつたのはしづかである。「永平寺の夏」二十五首中の一首である。この歌は、永平寺で開催されたアララギの夏安居會に出席したときの即詠であつた。田など無いであらうと思つて寺の奥の谷へ來たところが、青々と植田が見えたのである。多くの人々との會合に、作者の心は平靜でないものがあつたらしい。偶、寺の奥谷あたりを歩きながらもの静かさを植田に感じたのであらう。

この寺は、午前三時半から僧侶は起床して朝の行事に入るのである。會の人々は、四時起床であつて、曉の星空を仰いで顔を洗ふのである。すでに本堂では朝の誦經が始まつてゐる。マラリヤ蚊に螫されながら朝の講義を聴くのであつた。あまり風通しのよくないこの寺院は、大杉が庭に林立してゐて

いかにも暑い。作者はつましく朝晝夜食事偈を誦んで人々と共に飯をいただくのである。左に齋藤茂吉氏の文章を引用しておく。

嘗て永平寺でアララギ安居會をひらいたとき、食事のまへに食事訓といふものを合唱する。中村君が少しおくれて来て、それにひどく興味を有つたが、僕のそばに坐つてゐるので、僕の發音が邪魔して、どうも妙味が分からないと云ふ不平を云つたことがある。

かう云ふ文章の上に、憲吉調と、茂吉調の作歌の問題が移し考へられよう。自分達の語音を氣にかけながら食事偈の誦まれた、その頃の友情が深く偲ばれるのである。

谷川のながれの石に枕して胸越すみづを嬉しみにけり

私もこの谷川に浸つたのであるが、寺院の前を流れる川水は、行水するのになかなかよかつた。

あかときの山内にして雷のごとき法鼓おこりて

心のふるふ

早曉行事の歌である。元氣あふるる許りの歌である。「永平寺の夏は、いづれの歌も調子が緊張してゐて、所謂山寺、大禪寺の面影を深く偲ばしむるに足りる程の歌が揃つてゐると思ふ。

蒸しむしと谷のゆふべの明るきはなほ雨雲の去り切らざらむ

暑くて、雨降りが欲しかつた、永平寺の庭が思ひ出される。雨も降つたが、忽ち止んで又むしむしと暑かつた。

ころも著てあはれなるかな山門へ野良の作務よ  
り僧かへりけり

野良仕事から歸つてくる禪僧の姿である。厳しい寺の掟は、都會生活に慣れた人々には、全く驚異の眼を瞪らしめたのであつた。

門に出ば眼に在る四方の黄葉さへそこはか

散りて秋のみじかさ

家の門に出ると眼に入ってくる四方の木々の黄葉すらその邊に散つて、秋の日の短かさが感じられる。「晚秋雜詠」六首中の一首である。日常眼に入る景色も、云ひ難い寂しさをもつて眺めれば、おのづから自然の中に自分の心の動きを見ることができるのであらう。つまり如何にして季節の推移を現はさうかと云ふ意圖もあらはでなく、自然の前に心の寂しさが知られる。

四方山に霜おく日らのすくなけむ今年よもやまの黄葉け

だし寂さびしき

霜が少いので今年の黄葉がおほかた寂しいだらうと、黄葉の色を氣にしてゐるやうな歌であるが、必ずしも黄葉の色のみを氣にかけてゐる歌ではない。これらの詞句には、多年の作歌苦勞が暗示されてゐて、一見平凡の句のやうであるが、自然を凝視する作者の姿が感じられる。

作者はよく「さみし」の語を用ゐてゐるが、この歌は珍らしく「さびし」と云ふ語

音になつてゐる。一寸した事だが注意しておいてもいいであらう。かうした小さい詞句の變化にも作歌者はなかなか神經過敏なのである。

寢いね寐ねがたき夜よるをなやみぬ吾われがくせの寢酒ねざけを  
やめし寂さびしさのみならず

眠れずに夜を悩んだ、習慣になつてゐた寢酒を止めた寂しさのみではない。「曉霜」十二首中の一首である。不眠症にかかつてゐた作者は、寢酒の習慣をつけて了つたらしい否、若い時分からの寢酒が、不眠症にならしめたのであらう。この歌は、必しも不眠症の悩みを詠んでゐるのではなくて、家庭の事情とか、村のかかはり事に心を悩ましてゐるその氣持なのであつて、それがどこかに詠まれてゐる譯である。

日けならべてこころの憂うれさやかかりごと彼かれもこれ  
もの捨て置きがたき

かういふ歌をみれば分る。人間の持つ小さい事件、これらの仕末は、人の生きてゆく上になさねばならぬ重大な務なのである。偶、都會に出てくる作者は、常に郷國の仕事と云つても村の些細な出來事にまでも心を煩はしてゐたためか、何か急がしさうに見えてならなかつた。重大な任務が、形は分らないが、作者の上に覆ひかぶさつて來てゐたのであらう。

春さむき梅の疎林をゆく鶴のたかくあゆみ  
て枝をくぐらず

春寒に、梅の木まはの疎そらに立つ林を、首を高くのべて歩いてゆく鶴は、枝の下をくぐらない。「梅林の鶴七首中の一首である。岡山後樂園所見であつて、梅林の鶴圖と云ふ趣きで、明らかに日本畫の手法から來てゐる歌である。かうした題材の歌は、多く月並風になつて了ふところだが、近代の藝術にも深い理解のある、さうして天成的な技法は、作者は、天成的などと云ふ讚言は嫌ひであら

うが、思ふがままに梅と鶴の陳腐な題材に少しも舊さを見せず、氣品のある表現をなした。「たかくあゆみて枝をくぐらず」の妙句は、實に鶴全體の特長を生かして遺憾がない。

枝がちて蓄つぼみながらの梅の園しら鶴を清く居らし  
めにけり  
梅林ばりんの外とにでて鶴は羽ばたけり芝生につくる影  
のおほきさ

これらの歌の部分々々の觀察は、すべて日本畫の筆法から會得したものと見ていい。題材そのものが、日本趣味であるから、當然作者の感動もそこに落著くのであるが、この日本趣味の範疇を出て、自己の主觀的な觀方を確立せしむるのは、不用意な表現では容易になし得られない。鑑賞上の知識が製作者の方に豊富である事を條件とする。一方現代の藝術鑑賞者には、幸ひにして憲吉のこの歌の狙ひ所をある點まで理解できる人が多いかも知れない。しかし作れる人を稀とする。いまこの一聯についての製作當時の模様を上代



皓三氏の文章によつて偲ぶことにする。

昭和三年二月中旬、夫人が岡山醫科大學を訪はれた際、同道來岡された時の事であつた。先生に隨つて私は當時醫大の内科に居た桑原邦司君と一緒に、後樂園をおとづれた。寒風が吹いて雲の動きがあわただしく、園内は時に曇り、時に太陽の光が射した。老松の梢に風が鳴り、泉水の面は小波のために曇り、出て遊ぶ鶴の姿も少く、勿論かかる時に公園をおとづれる人影はなかつたのである。先生は非常に熱心にあちらこちらを見廻られ、屢々園内に散在する小亭の閉ざされた扉をあけたり、開かざるものは扉の隙から内部をうかがはれたりした。いろいろ公園の事についてたづねられたり、種々なる樹木についてその名稱を訊かれて、案内役の私達はお互に自分達の無知に赤面した。そのあとで私達は料亭鳥兵衛で先生に御馳走になつた。外には綿雪が散り、先生は酒の味を解せぬ私を相手にして盃を傾けられた。

この上代氏の語られてゐる中に、作者の作歌態度がところどころに感じられる。『屢々園内に散在する小亭の閉ざされた扉をあけたり、開かざるものは扉の隙から内部をうかがはれたりした。』よく作者の様子を寫し得てゐる文章である。つまり作者の歌の一つの特色として感じられる事は、所謂、自然物の様子が克明に現はるるまで寫生を怠つてゐない事だ。しかし、このころの作者は、寫生と云つても、さう云ふ手段のみに苦勞をせず、先づ事象の全體の空氣を觀察して、そこに動くもの一部分の把握によつて、全體を現はす工夫をしてゐるかのやうである。この作歌工夫をやるために、作者自身も常に動きつつある點を吾人は知らなければならぬ。

朝がすみ舟こぎ出れば河ぐちは海たひらに  
てとほきしら雲

朝霞がこめてゐる、舟を漕ぎ出てみると、河口に交はる海の面が穏やかで、遠い空に白雲が浮んでゐる。「磯海の春」十二首中の一首である。この景色は、瀬

戸内海の一部であらうか。調子が角ばらないで、表面が平靜で何事もないやうであるが、内面に沈んだ寂寥味が感じられる。吾人は四季の變化に敏感である。特に詩歌をたしなむ人々にとつては、季節の觀察に非常に鋭敏な神經が活動する。古來和歌の妙味は、四季の變化による感動を捕捉するところに努力が意識的にも無意識的にも拂はれた。それであるから、この關係を深く知つて自然に心を出入できた人が注意されたのである。

春明きうれひおぼゆれ磯山の郭公どりは海にき

こえ來

春明あかきうれひは、明るい何かうつろなもの寂しさを覺える氣分であつて、この時空はどんより曇つてゐない事は分る。感じ方によつて、春暗きと云つても成功するのである。とにかくどういふ憂ひであるかそれがはつきりとは分らなくともいい。たまたま吹く風を身に覺えて、冬も來たらしいとか、春のやうな氣分であるとか云ふ觸感は、常に吾人の經驗してゐることだが、ここを鋭く作歌者は感じてをればいい。海の上と郭公のこゑ、これだけの事象の中

に、作者の季節に對する感受性が活動してゐる。

白雲の下りる沈める谿あひの向うに寂しかつこ

うの聲

右の一首は、大正十三年の赤彦の歌である。参考のために擧げておく。

親ぶねの櫓うぐらのしたに網たぐる網子あみこの裸體はだかの  
揉みあひて見ゆ

親船の櫓の下にゐて海中から網をたぐり寄せてゐる漁士達の裸體が揉みあつて見える。「鯛網船」二十七首中の一首である。「遠舟影」「網子唄」「魚群閃躍」からなる一連である。瀬戸内海の鯛網船を、近くに見ながら船上にゐるのである。多くの漁船が、静かな内海に群れてゐて、各船上では様々な動作がつけられて、漁業に勤しむ人々の姿が見えるのである。作者は心ゆくまでその海の上に船を浮べて漁船の間を縫うて遊んでゐるのであらう。

遭ふ船の帆かげちかより大きなりその舟びとに

物言ひてすぐ

百ぶねの奥がの海にひろがれる船の列あり網曳

すらしも

詳細に海上の船の動作が歌はれてゐる。「帆かげちかより大きなり」等の句法は、日頃の寫生の賜であつて、かう云ふ歌の味ひは、どうしても憲吉の歌の特色であらう。

人麿の歌

飼飯の海には好くあらし苅薦の亂れ出づ見ゆ

海人の釣船

赤人の歌

繩の浦ゆ背向に見ゆる奥つ島榜ぎ回む舟は釣爲

すらしも

萬葉には、かう云ふ歌もあつて、憲吉調も萬葉に負ふところが多い。これは

申すまでもないことだ。ただ現代の歌の特長として萬葉の歌よりも心理的な表現が重んじられてゐるために、純粹な海の寫生のやうであつても、そこには、先づ海の状態を描く意圖がはつきりと見えてゐて、いかにも海の上に行はれてゐる諸現象の巧みな表現作用と謂ふ事が感じられる。特に憲吉の歌には、一も二も表現の苦勞と、その結果としての効果を豫想するものが重厚にあることが思はれる。

大網をひき重りぬる親船は碇の舟の漕ぎとどめ  
をり

網船にひきあぐる網濡れわたり眞あたらしき潮  
の香ぞする

詞句の抑揚斡旋の妙は、憲吉ならでは現はし難いものがあつて、かういふ技法を會得するまでにはどの位る作者は、苦勞したであらうか。「ひき重りぬる」と云ひ「碇の舟」と云ふこの詞の關係は、可成り微妙な神経が使はれてゐる。網が濡れてゐて、さうしてあたらしい潮の香がする、と云ふ表現は、技法のうま

みと云ふよりも、感じ方の修練から來てゐるとおもふ。鋭く感覺を働かして作歌する時代は、作者は遠く過ぎてゐるので、見たままの感じに過去の經驗が無意識の裡に加はつて、表現上の妙味が自然と現はれて來てゐるのであらう。作歌態度としては、靜かな落著を示しながらである。

ひる飯いひを焚いきはじめつつ去さる網船あみねと海のとほくに別れぬるかも

この一首が「輕雷集」の最後の歌である。「鯛網船」の一聯のメくくりの歌として作者にとつては意義深い歌でなければならぬ。

山のうへに海濱うなはまありと思はねど霧きりさめ潤うるふ  
霧よまの砂濱

山上に海濱があると云ふ譯ではないが、霧雨に潤ふ火山灰の砂原はあたかも砂濱だ。「阿蘇山の歌」三十三首中の一首である。作者歿後編輯された歌集、

「輕雷集以後」に收められた歌である。この「阿蘇山の歌」の一聯は、「阿蘇山途上」「阿蘇大裾野」「草千里ヶ濱」「古坊中の道」「砂千里濱」等から成る作であつて、「輕雷集以後」集中の一大雄篇とみていい。他にこれだけ作者は多作してゐないやうである。この砂千里濱は、私も同行であつて、いかにもその名の示す通り海濱に似た砂の原であつた。霧が吹き飛んで雨さへ落ちた。霧のために砂原の上は模糊とした感じで、勿論眺望がきかなかつた。ここの砂千里濱に來る途中に、草千里ヶ濱と云ふところがあつて、これは牧場となつてゐて、小高い青草の山に、牛馬が遊んでゐた。

奥ふかき草千里濱の雨にあひ道べに立ちし雉子きざす  
をぞ追ふ

この歌は、歌會の席上吟であつたとおもふ。アララギ發行所主催の、夏安居が、阿蘇山の湯の谷温泉で開かれた。作者は、その會への出席のために阿蘇へ來たのである。

大裾野を歌つては、

遠ぐには耕しごと異なりて霧のはたけに陸稻  
つくれる

阿蘇びとは物荷ふこととむらしはつかの荷  
をもみな牛に付く

阿蘇山へわが乗る牛をやとひけり茶屋に曳きく  
る矮き赤牛

阿蘇山へ登るには、牛か馬に乗らなければならぬ。私達も牛に乗つて登つた。谷を直ぐ下にみる道に添うて乗つて行くのだが、いまにも牛が谷間へよるけさうな氣持がする。とにかく牛に乗つて登るところに風趣がある。

天つ霧あたりを鎖ぢてかきこきや火口にちかき

地の底ぞ鳴る

霧の卷く音が聞える、さう云ふ中を登つてくると、ふかぶかとした火山灰の原である。そこを通り過ぎると、岩群の出てる山原に来る、そこらには青いものは絶対に見えない。噴火口のあたりはやはり霧の原で、煙の昇る火口壁

の間へ下つて行けるが、硫黄にむせていくらも先へは下つて行かれなかつた。休火口の底が遙かに見えて硫黄がぶつぶつ沸騰してゐる。

阿蘇の頂上では私達と一緒に寫眞を撮つた。風に吹き飛ばされさうになる麥藁帽子を手で抑へながらかぶつて寫つてゐるのが作者であつた。旅行詠として阿蘇山の一聯は、作者最後の多作を示したものであつた。

松井一郎氏の文章で、阿蘇山の湯の谷温泉の、安居會席上に於ける作者の様子を知つておきたい。

安居會最終の夜は、夕食後皆講堂に集まつて(但し女子會員は除外して)冷酒に鯛の肴で小宴が催され、めいめいが所謂お國自慢の隠し藝を出し合つて團樂をつくした。さうして就寢の時間にもなつて一應は各自の室に引上げたのであるが、少し酒好きの連中は又おのづから一室に集合して、高田浪吉氏や辻村直氏らを取り圍んで二度目の酒宴をはじめたのである。この酒宴は或ひは度を過しさうな状態であつたから、一度は土屋先生が廊下の外から御注意されたのであるが、先生が行き過ぎられる

と又もとのやうに打ち騒いだ。暫くたつて、今度は中村先生がひよつこりその室に這入つて來られた。先生は別段に怒つてゐられる御様子もなく一同の間にお坐りになられたのである。皆は先生のお酒好きを知つてゐるものだから、あちらからもこちらからも盃をさし出すものがあった。先生は暫くの間共に一所に幾杯かの酒をも飲まれ、また御話などもされてゐたが、やがて穩かに、もう大分おそくなつたし他の迷惑にもなるのだから早く寝ることにし給へ」と簡單に注意されながら室を出て行かれた。皆の者もこの先生の御言葉に従つてやがてめいめいの室に引きあげた。先生がこの騒擾を極めてゐた酒宴の中に這入つて來られたのは、實は早くこの酒宴をやめさせる爲に外ならないのであつた。然しながら先生はだしぬけにそれを仰るのでなく、自身も先づ一二杯の酒を飲み、談笑のうちに皆の心持を柔らげさせ、或る汐合を見て解散を促されたのであつて、その邊何だか非常に具合がよかつたのである。

少し引用文の長きに過ぎたが、松井氏の考への中に、やはり作者の面影と云

はうか、氣慨が躍如として現はれてゐる。阿蘇山の歌會は、作者は自分を重要な位置に感じ、行動と言説の中には後輩の會員に對する指導精神が動いてゐたやうだ。しかしながら、作者はむやみと理窟を云はずにじわじわと作歌上の教育をしてゐたやうである。先づ身を以つてそれを實行してゐたやうだ。だがその實行は、表面へ容易に出てくるものではなかつた。そこに憲吉らしい大きい根張り強さがあつた。

秋の空に雲おほくなりて池の魚影にしばし  
ばおどろきて散る

秋空には雲が多くなつて池にはその影がうつるので、魚は頻りに驚いては散る。「秋日」四首中の一首である。秋の一日の諷詠であるが、どこかもの寂しい影のさした歌であつて、常にみてるた自然でなければ、こんな風には表現なし得られぬ。秋の空に雲が多くなると云ふ觀方には、特に新らしさは感じら

れぬが、雲の影に魚が驚くと云ふ感じ方が上句を生かすだけのものを持つてゐるのである。もつとも、魚の群が影に驚いて散ると云ふ表現にも、在來の感じ方から脱しきれぬものはあるけれども、歌境の上に觀ると云ふことが特殊なのかも知れぬ。

川邊<sup>かはべ</sup>田<sup>だ</sup>の稻の粉花の散りそめて池にいるみづ鯉  
をやしなふ

この歌の方があゝは歌として調が高いのかも知れぬ。

心よわく病みつと思へば命をばおろそかに  
過ぎし悔おほくあり

心持も弱くなつて、病氣する自身を思ふと、命をおろそかにしてすぎてきた事が後悔されてならぬ。「病床漫詠」十首中の一首である。昭和五年の年の始めに、作者は肋膜炎を病んだのである。この病氣が不治の病ひとなつたので

あるが、この年は、病ひも小康を得て、恢復をみたので、諸方へ旅行をしてゐるのである。この歌は、單に自分の命を省みた時の歌で、一つの述懐であるが、赤彦にもかうした氣持を歌つた歌のあるを思ふ。命をおろそかにしたと云ふことは、自己に執するため、あるひは、個性を尊重すると云ふ大きい努力があつて、勢ひ體に無理をしてまでも物事に徹してゆかうとしたのである。そのもつとも大きい對象は、歌の道であつた。歌の道の上にはつきりと自己を確立する事、これは精神的に可成りの苦勞であつたが、作者は、酒の勢ひでその作歌衝動を呼び起した筆を持つにも、酒を飲まぬとどうも書けませんでねと云ふことも人に話してゐる事があつた。かうした過去の様々な經驗を省みてこの歌はできたのである。

海遠く旅行く君を一目もが途中で船を捉へ  
て逢はむ

西歐に向ひ旅立つ君に、一目たりとも逢ひたい、君の乗る船を途中で止めて逢はう。「平福畫伯渡歐送別」の一首である。昭和五年二月二十七日、平福畫伯は、伊太利へ赴くべく神戸を發つた。「一目もが途中に船を捉へて逢はむは、畏友を思ふ眞心の發露である。この年の始めに作者は肋膜炎を病んだが、やや健康状態に復してゐたので、神戸で畫伯と逢ふことが出來た。この歌から感じられるものは、體を無理してまでも、友に逢ひたい氣持の流れてゐることだ。

雪荒れのけふの日暮にかぎりなく人のいのちを寂しくぞおもふ

烈しく雪の降つてゐる夕方、かぎりなく人の命のはかなさが寂しく思はれてならぬ。「加納曉君を悼む」六首中の一首である。加納曉氏とは、アララギ關係の友人であるが、大正八九年頃、加納氏の父君の貿易業に携はらうとして、特に加納氏との交友はつづけられ、従つて親密な友情關係が生じてゐるのであ

る。歌の上では、作者は加納氏よりずっと先輩であつて、師弟にちかひ關係にあつたとも云へる。二人はいづれも酒を好み、加納氏も酒の爲に仆れたとも云へる。この憲吉と曉との氣風は、とかく硬化しようとするアララギの空氣を柔らげる存在となつてゐた。「加納曉君を悼む」の一聯には、涙滂沱として悲しむ氣持が、言々句々の裡に潛んでゐて、この年下の人の死を悼んでゐる。この作者にしてこの作品のあるを思はしめるのである。

病むわれにくらべて思へばこの夕餉胸につかへて君のなげかゆ

「病むわれにくらべて」とはいかにも作者らしい感動だ。作者の歌には、かう云ふ絶對的な氣持を寄せる人情味のある句法が少なしとしない。一面病者の心理状態も感じられるが、尊敬すべき作者の態度である。

三寶のこゑ鳴くとりは大師さへいみじき鳥と聞きたまひけり



三寶と呼びざるを立てて鳴く鳥は、古へ弘法大師すら尊い鳥と思つて聞き給うた。「佛法僧鳥」十首中の一首である。「三寶」は云ふまでもなく、佛と法、僧の意味で、三つの寶である。「ブツポウソウ」の音にもきこえる鳥のこゑで、その鳥を佛法僧と云うた。現代人の耳にも恐らく昔の偲ばれて聞えるであらう鳥のこゑを、「大師さへ」と云ふ作者の感慨を、こよなく懐かしく私は思ふのである。アララギの夏安居が、昭和五年八月、紀伊國高野山上で開かれた時の歌である。この時の歌會で、作者は席上吟を多く詠んで元氣の様子をみせた。詠草の數は、たぶん一首限りであつたと思ふ。それなのに作者のみその規約を破つて作つてゐるのだが、こゝら邊のところは、赤彦と違ふのである。しかしながら作者の行爲には、寸毫も不自然さが伴はぬのである。會が終へて、私達一行は、尾根傳ひに歩んで、大峰山へ登るべく高野山を發つた。後に、作者と、齋藤茂吉氏とは残つて、縁側に踞んで私達一行を送つてくれた。高野山を下つた作者は、飛鳥へ廻つてそこで、齋藤茂吉氏、森山汀川氏と一泊した。高野山の歌二三

首左に引用しておく

むささびも呼びてなかぬか暮れかかる高野のお

くの眞別處みち

ことさらに人來ぬ谷に建てしてら今にしづけし

眞別處院

うつし世に久遠のみちは戀はずともわが下凡さ

へなげかで過ぎし

佛寺に對する作者の敬虔な態度は、いつもこの通りにつつましく、一人の道を歩みつづけてゐる。これらの作は、安居會後の歌であつて、會衆が去つた後、齋藤茂吉氏と共に奥の院まで詣でた折の途上吟である。夏期に行はれるアララギの安居會の最後の作者の詠草ともなるもので、多數のアララギ會員と相會した機會は、高野山の歌會をもつて終りとなつてゐる。高野山に居住する稻岡卯一郎氏の「高野山と中村先生」の一文を擧げておく。

昭和五年高野山の安居會の後、私は先生や齋藤先生を奥の院や伽藍に

御案内した。その日開白の盆不斷經は一山皆衆の盛事で先生の御望で午後はやくから大會堂に入った。烈しい夕立が来て幾時間もつづき誦經とまじる雷鳴は法要を莊嚴にして先生も齋藤先生も非常によるこび合はれた。

夕方に雨は止み眞別處に越えた。山寺の庭はさき程の豪雨に砂が流れ雨にうたれた沙羅の花がおちてゐた。先生は拾つてそれを笕の水で洗はれたり寺門の鐘を撞かれなどして高野に残る昔ながらのしづけさを讃められた。この夜の歸途は一張の提灯を小生が翳し老體だといふので齋藤先生を中心にし先生はその後につかれた。

作者の高野山詠を味ふに、右の稲岡氏の追憶文は、好箇の参考資料となるものである。

かかはりの多きいく年や忘れはてて旅のひと夜を友とをしみぬ

なにかと關り事の多い幾年であつた、それも忘却して旅の一夜を友と睦び合つた。「飛鳥」三十一首中の一首である。

『八月十日、齋藤茂吉森山汀川兩君同行飛鳥の岡に宿る』と云ふ詞書がある。飛鳥は、かつて島木赤彦と宿つた土地である。赤彦の歌を二首引用しておく。

わがために二日の業を休み來しと夜を寢る明

日香の家に

明日香川瀬の音ひびかふ山峽に二人言止みある

が寂しさ

赤彦四十七歳の時で大正十一年作である、憲吉三十四歳の時であつた。憲吉の右の飛鳥の歌は、昭和五年四十二歳の時である。赤彦と同行の折は、匆忙の生活の中にあつたためか、憲吉には作歌がなかつた。いま飛鳥の地に来て、往時を偲び、友と語り合つて心ゆくまで旅寢の楽しさに浸つてゐるかのやうである。『ゆくりなく明日香にきたりうつそみは九年ぶりの旅寐をぞする』やはり感慨深い歌である。さうして、鹿兒島高等學校時代の友高崎義行君の

墓を坂田の里に来て詣でてゐる。『わが知らぬ十年のうつりいたいたし君が血すぢの殆どほろぶ』と歌つてゐる。旅に来てただ過去を追想する作者の感傷は、單なる感傷ではなくて、人生の理を知つて世相をみようとすする不斷の氣持が歌の内面的事實となつて籠つてゐるのである。同行の齋藤茂吉氏と岡寺門前の旅籠屋に泊つて『たづさふる友を見て思ふうつそみは肝むかふ君とわれとのこれる』かういふ歌もある。亡友の幾人かを偲び、現在共に遊ぶ友に對つて、かくの如く歌をもつて訴ふるところがあつた。

白きもの川邊に飛ぶはいそがしく此處に居りにし鶴鴿ならし

白いものの影が川のほとりに飛ぶのが急がしさうに見えた、あれは眼の前に來てゐた鶴鴿であらう。「冬の鶴鴿」五首中の一首である。敏速にとぶ鶴鴿らしい動作を歌ひ、印象的の趣きがある。「此處」には、他の歌から推測して、庭の

中と思ふ。

ガラス戸にながるる霧や朝ぎよめ塵をしづめし  
部屋をとぢなむ

何んでもない歌の境地のやうであるが、明るくて清しい人間一人の行動が、もの哀れに表現されてゐるのである。これらの歌があつて「輕雷集」中の昭和六年の歌は終へてゐる。このやうな故郷の家の日常吟を残して、微恙をかこつ作者は、五日市へ移住して行つたのである。

月蝕のひかり低くして波にあり潮満ちきた  
る家裏の堀

月蝕の光が波にひくくうつつてゐる。さうして潮は家裏の堀へ満ちてくる。「しばし五日市に住みて」五首中の一首である。かう云ふ歌境は、いままでの作者にも稀であつたし、一般的にも珍らしい境地であるかも知れない。「ひ

かり低くしては、波の上に鈍い光が流れた感じである。さうして月の傾くころあひを歌つてゐるのである。病ひを養ふために、作者は、瀬戸内海に面し嚴島に相向つた五日市の家に住居したのである。

旅にして今宵住みつく家のうら枯蓮田かれはちすだに時雨降しぐれ  
りいづ

旅中即詠とは思へぬ落著いた歌柄である。枯蓮田と時雨、この二つの對照は、俳趣味的な季節感を思はしめるところがあるが、作者は巧みに自己の息を吹きかけて生かし得たのである。廣島市外五日市町古濱滞在中の作者の様子を知るために扇畑忠雄氏の文章を引用しておく。

五日市の御寓居は内海に面してゐて嚴島に相向ふことが出來た。海の日ざしに顔色の焼けた先生は髭のびてベッドの上に仰臥してゐられた。又床の上に起き直つてたのしげに草體の字を稽古されてゐることもあつた。

病牀生活は、これからずつと晩年まで續いてゐるのであるが、昭和七年の十月には、五日市を引き上げて、布野村の家に歸り、翌年の一月に再び五日市の假寓に來て靜養してゐるのである。

春の日の須臾しゆゆに闌たくれば鉢の牡丹ぶつぽん二日ふつかかか  
りておもく開きぬ

春の日射がしばらくの間に闌たくなつて鉢植の牡丹は、二日ばかり時日を要しながら重く花片を開いた。牡丹の形狀を巧みに描いた諷詠とも云はうか、所謂牡丹の花の咲く光景ありさまを深く理解した歌と云へるのである。幾日も病臥の床にあつて親しんでゐた作者の姿が、この牡丹の花の咲く状態に、びたりと合致してゐる。腹藝と謂ふ言葉があるが、この歌は、腹の底から生み出されたといふ感じを與へるのである。作者は牡丹の花のみに心を集めてゐるやうであるが、この歌の底に流れてゐるじわじわとした調の強さは、性質的のもの、の現はれがあるので、この作者であるから、かういふ歌が作れると云ふ感じが